俺はチート能力で日本を救う（仮）

オーレリア解放同盟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺はチート能力で日本を救う（仮）

【Ｎコード】
Ｎ７３６６Ｗ

【作者名】
オーレリア解放同盟

【あらすじ】
パラレルワールド――――――
それは異世界、異次元、天界等の世界ではなく我々がいま生きている世界と同じ宇宙と時限を持つ世界。日本語に訳すと並行世界・平行世界と訳される。
超能力を手にした少年は、大国間の争いで占領されたパラレルワールドの日本を救うため奮闘する。＊感想くれると作者は喜びます

＃１　出会い（前書き）

前作品と同様かなり無茶苦茶な展開がありまくりで、作者の暇つぶしにより作られた作品ですが、それでもＯＫという方はどうぞよろしくお願いします。

#1　出会い

パラレルワールド――――――
それは異世界、異次元、天界等の世界ではなく我々がいま生きている世界と同じ宇宙と時限を持つ世界。日本語に訳すと並行世界・平行世界と訳される。

その並行世界の数は数えきれないほどであり、今君がトイレへ行っただけでいくつもの並行世界が出来てしまうことだってある。
そしてこの世界の日本は我々の知る日本とは違う。
この地球は日本の一極支配中だ。東アジアから中央アジア、東南アジア、太平洋、北アメリカに至るまで日本は領土を得ている。経済・軍事・国土この3つが世界一位で第二位のＧＤＰを誇るアメリカとの差は7倍。そんなチート国家である日本ではある国家計画がちょうど終わったところだ。

「もう少しだ・・・・パラレルワールドの日本よ。もう苦しむことはない。我々は世界においても類を見ない最強の民族である。共に発展しようではないか・・・」

一人の男性が怪しく一人語りを始める。そしてその目の前には大量の機材。

「誰もこのカプセルにいないということは取りあえず別の日本へ行けたわけだな？」

「はい。取りあえず理論上ですが・・・」

何とあいまいな発言をする研究員。日本が進めてきた国家プロジェクト
「多次元日本救済計画」
パラレルワールドに存在する日本がひどい惨状ということを知ったのはパラレルワールドに行くためのパラレルワールドワープ計画の副産物だった。それにより発展した計画がそれだ。計画は名前の通りひどい惨状にある日本を救うという計画だ。

そしてその計画の第一段階がこの日本で終わった。そして別の世界の日本で第二段階へ進もうとしていた。

２０５０年――――ナガノ国境付近
周りを埋め尽くしている廃墟と焦げ跡、死体はここが戦場であったと素人でもすぐに認識できるような悲惨な地域と証明している。それもそのはず。ここはＮＡＴＯ軍とＳＴＯ軍との戦闘の最前線になる場所だからだ。

「まだか！！まだ見つからんのか！！」

「しかし、ここら辺の建物がじゃまで、北日本人民解放戦線が何処に潜伏しているか解りません」

「なら建物を焼き払え！！所詮ここら辺は日本人居住区だ。上の方から日本人が作戦の支障になれば殺してもかまわないという命令が来ている。北日本に住む日本人に人権などないに等しい」

「で、ですが、国際法として」

「何を言ってる？ここは俺ら中国の領土なんだ。国内のデモで何万人殺してきたと思ってる？今更日本人の１００人や２００人死んでも変わらん。今は一秒でも早く戦場に着くことだ。建物など粉砕してしまえ！！」

上官の命令には逆らえずテロリスト狩りをしにきたＳＴＯ軍という名の中華人民解放軍はここら一帯の日本人居住区を戦車や装甲車で蹂躙していった。逃げ惑う日本人も容赦なく轢き殺していく。理由は簡単。表向きはテロリストせん滅に障害になるから。本音はストレス発散。過去の恨み。

「ひ、ひどい・・・・・」

中国軍の行動を目の前で見ていた少女は恐怖に怯えた。それと同時に心の中からわきあがる怒り。
だが、彼女は無力で何もできない。所詮は何もできない力なきもの。彼女はそれがこの場で嫌でも実感した。

「・・・・まずい！！」

通学の途中にその行動を見ていた少女は気づかれたと自覚する。必死の思いで逃げるが、時速１００ｋｍを超す戦闘車両とレースをしたところでウサイン・ボルトもかなわない。いくら人類があがいたところで敵う相手ではない。
要するに、逃げられない。あの人達と共に私も殺される。

「！！！！！」

死を覚悟した。

だが、それにしては長すぎる時間。何も痛くなかったけど、あの世へ行けたのかな？
そう思う彼女は恐る恐る目を開ける。そこには・・・

「天使・・・」

目の前に立つ翼を生やした少年。その姿は天使のようだった。

「残念だったな。あいにく天使ではなく人間だ。そしてここも天国ではなく地球だ」

よく見て気付く。私は死んでいないと。
そして目の前の少年は

「な、何してるの！？」

背中に生えた2枚の翼で装甲車の進路をふさいでいた。

「何やってんだ？国際法違反だぞ。民間人を殺すのは！！」

目の前の少年は中華人民解放軍に何事もないかのように淡々の話しかける。だが、中華人民解放軍兵士にとっては恐怖でしかなかった。
巨大化した翼を前方に振り出すことにより次々とテロリスト狩りにきた部隊の戦闘車両を破壊していく少年。そんな非常識な風景を無力な少女は目の当たりにした。

「あ、あなたは何者？」

恐る恐る尋ねてみる。彼が本当に人間か確かめるために。

「俺の事か？俺は別の、パラレルワールドの日本から来た、この日本を救う者」

「はい？」

この子の頭は大丈夫なのか？彼女は本気でそう心配した。

そして、これが少女と少年の出会いだった・・・

#2　多次元日本救済計画

――――――こんな世界・・・潰してやりたい。

何回も思ったことだ。何で私たちがこんな目に遭うの？

ねぇ？誰か教えてよ・・・ねぇ、誰か助けてよ・・・

「・・・・夢か・・・・」

げっそりとやつれた顔をしてベッドから起き上がるのは赤薙綾菜（あかなぎ あやな）。

１７歳。取りあえず近くのＳＴＯの高校へ行っている。

ＳＴＯとは上海条約機構の略で、加盟国の中心となっているのがソビエト連邦と中華人民共和国、朝鮮連邦。他には元ワルシャワ条約機構加盟国等だ。

そして彼女が住んでいる地域は北日本。糸魚川構造線付近だ。

北日本と言ったのはわけがある。北日本は形式上ＳＴＯ共同統治地域だからだ。

戦後侵略してきたソ連は千島列島だけでは飽き足らず、北海道・東北地方を制圧してアメリカ軍が来るまでに糸魚川構造線まで侵略した。

更に言えば侵略した地域は日本だけではなく朝鮮半島まで侵略し朝鮮連邦という傀儡国家まで作り上げた。

だが、北日本だけは独立をさせなかった。原因は諸説あるが、有力なのは西日本に大日本国というアメリカの傀儡国家がつくられたからだ。北日本を独立させるより、統治している方がはるかに軍を動かせやすいし、自治権がないため独自の行動をすることがない。そ

う考えたのだろう。

「・・・・お父さん・・・・お母さん」

机の上に飾られている写真立てを見る。まだ小さい時の写真だがそこには今は亡き父と母が写っている。別に心霊写真というわけではない。

「なんで・・・殺されたの・・・・」

嫌な夢を見たせいかその事まで思い出してしまった。
父は思想犯として第４８次シベリア抑留へ送られ亡くなったと聞いている。母の方はＳＴＯの病院でまともに手術すら受けてもらえず衛生環境の悪い中で死んだ。ＳＴＯに殺されたも同然だ。とりあえず今は、両親が残した遺産と、現在実質的に統治している中国から僅かに送られてくる給付金だけだ。

「臨時ニュースを申し上げます」

綾菜は無駄に早起きをしてしまいすることがなく取りあえずテレビをつけた。
テレビに映る風景は数十年前の９．１１を思い浮かべるような景色。

「昨日朝５時に北日本人民解放戦線と名乗る武装勢力が旅客機を占拠し、ＳＴＯ軍関東司令部に突入した事件についてです。現在解っているだけで約４８０名の死傷者が」

どうせいくらあがいても無駄。テロなどしてもどうせ人が死ぬだけで独立などできるわけがない。

「なお、この武装勢力はＮＡＴＯの支援を受けていた模様・・・ＮＡＴＯはメンバーの引き渡しについては全面拒否。このテロはＮＡＴＯ側の宣戦布告なき攻撃とみなし本日６時に国境においての我がＳＴＯとＮＡＴＯの武力衝突に発展」

「・・・・マジで・・・・・」

歯磨きをしていた綾菜は衝撃の事実に口から歯磨き粉をぼたぼたとたらしていた。

「誰か助けてくれないかな・・・」

そんなヒーローいるわけがない。解っている。でも、声を出して言ってみたかった。

“ゴツ”と足元の違和感。

「・・・・だれだっけかな？」

目の前には昨日のテロリスト狩りと称した日本人虐殺を目の当たりにした彼女を助けた少年がみの虫みたいに布団にくるまっている姿だった。

２０５０年――２億人近くの人々の血が流れた激動の２０世紀が終わってもう半世紀がたつ。死者数推定約１億を出した第二次世界大戦から数えれば１世紀にもなる。それなのに、人類は未だ分かち合おうとせず、ただいがみ合いを続けている。

資本主義とほぼ同じシステムを導入した名ばかりの共産主義と資本

主義の対立は開始してから1世紀になる。いわゆる冷戦――――

１９５０年
ソ連の傀儡国家となった日本民主主義人民共和国とアメリカの傀儡国家である大日本国との間に極東戦争と呼ばれる戦争が勃発する。これにより未遂ではあるが北日本軍がクーデターを起こしたため、自治権を与えるとクーデターの恐れがあるとのこで北日本という国は僅か８年で消え、ソ連の領土となった。

１９８０年代、アフガニスタンで苦しめられているソ連は中国という新たな脅威と衝突。アメリカから直接支援を受けた中国との戦争によりソ連は極東地域を中国に譲るということで和睦。
それ以降北日本は中国の領土となった。
その結果アフガニスタンに相手をしていられなくなったソ連は強制的に泥沼のアフガンから撤退をした。

それに伴い、ソ連は様々な改革を迫られＷＴＯ全体で経済の自由化を認めた。
それと並行するかのように中国も経済の自由化を進めたが、政治の自由化だけはしなかった。

経済の自由化で急激な成長を遂げた社会主義勢力は２１世紀に入り、頻繁におこる政治の自由化のデモ。それに対する強硬的な弾圧姿勢は社会主義勢力がさらなる尖鋭化をする後押しとなり冷戦構造は２１世紀になっても引き継がれた。

２１世紀初頭に混乱した第４の勢力（第三勢力は非同盟諸国）イスラム勢力に介入したＮＡＴＯと社会主義勢力との代理戦争は泥沼化。イスラム世界において結果的に独裁政権が消えたという例があるが、二つの勢力の仲をより一層対立させ、人々を混沌の渦に巻き込んだだけにすぎなかった。

２０３０年代。上海で行われた会議。ＷＴＯを解体し、新たにＳＴＯ（上海条約機構）を設立させるものだった。これには、社会主義勢力だけでなく反米非同盟諸国も参加するという露骨にアメリカに対抗する意志を持った会議だった。

そして冷戦開始から１世紀がたった今なお、冷戦はまだ続いている。

「で、君は何て名前？」

あの後体中から武器を展開して中国軍を圧倒し、全滅寸前まで追い込んだ彼は急に倒れこんでしまったため、彼女は仕方がなく家まで運んだのであった。

「名乗るのが遅れたな。俺の名前は核（さね）海聖（かざと）。１６歳だ」

「へぇ、私と同い年なんだね。で、あの時は混乱していてよくわからなかったけど、君いったい何なの？」

「“多次元日本救済計画”この計画こそ俺がここに送られてきた原因の一つだ」

「た、たじげんにほん？」

なんだそりゃ？と、言いたげな顔をして海聖をみる綾菜。

「あ、あの顔が近いんだが・・・これでも男なんだが？」

身長１８０近くて、軽い癖っ毛で色はすこし赤のかかった黒。まあ中性的な顔はしているが別に男の娘って顔はしていないから解るわよ！！

「そりゃ知ってるわよ。で、答えを聞いていない」

「す、すいません。俺が来た日本はＧＤＰが世界１位で第２位のアメリカとの差は七倍。圧倒的な国力を誇り日本が世界を一極支配している地球から来た」

「で、そのたじげんなんちゃらってのは？」

本来の目的を忘れていたわ。

「俺がいた日本でパラレルワールドに行くため、パラレルワールドというのは」

「それは知っているわ」

「わかった。パラレルワールドに行くための計画が始まりそれによってパラレルワールドの日本がひどい惨状ということを知った日本は国家計画で様々なパラレルワールドの日本に“超能力者”を送り込むことによって日本の周りの国々を駆逐し平和で安定させようと

考えた」

「様々なパラレルワールドの日本・・・他にもひどい日本があるってこと？」

「ああ。それなりに。この世界の日本が確認された日本の中で一番ひどい日本だが他にも中国や朝鮮から第二次大戦の賠償金を払えとか言われたり、政治がグダグダで終わっている日本など」

そんな世界が現実にあるのかと疑いたくなる話だが、ここにいる翼の生えていた少年を見る限り嘘ではなさそうだ。“生えていた”というのは過去形で現在進行形生えていない。

それについても気になるから今度聞こう。

「成程・・・未だに信じがたい話だけど、ようするにあなたはこの日本を救うために来てくれた人ってのでＯＫ？」

「取りあえずその認識は間違っていない。それとここまで俺を運んでくれたのは君だな？お礼が遅れた。感謝する」

「ええ！？いいよそんなの。むしろ私がお礼したいくらいで、あの時君が来てくれなかったら私死んでいたから・・・ありがとう」

物騒な人だと思っていたけど、悪い奴じゃなさそうね。でも、この子・・・子っていう身長じゃないけど、私が拾わなかったら何処に行く予定だったの？

「ねぇ？」

「なんだ？」

「核君は・・・どこか行く当てがあるの？」

「いえ、これと言ってないが・・・」

「なんて無計画な計画なの・・」

その日本の上層部はどうなっているのかしらね。
さすがの超能力者でも飢え死にしちゃうでしょ？

「大丈夫だ。俺の能力はメタモルフォーゼ。自分の身体を自由に変化させることができる。脳にインストールされたアプリケーションで初期設定を回復にしてるから不意を打たれても細胞組織が普通の人の数万倍のスピードで再生していくので大丈夫」

もう専門用語だらけで、何を言っているのか理解できないが、とりあえず俺は無敵だと言っている事は解った。

「・・・いや、それでも、食べる物とかないと死んじゃうでしょ？」

しばらく海聖は顎に手を当てながら考え込んだ。

「考えてみればそうだな」

「いい加減ね・・・」

「でも大丈夫」

「何が大丈夫なのよ？」

「だって君がいるし」

「は、はははは、はい！？」

ど、どどどど、どういうこと？それ・・・

「君は何をそんなに焦っているんだ？」

「だって、い、いきなり、そそそそ、そんなこと言われたら！！！・・・誰だって・・」

いきなりの上目づかいになり、顔を朱色に染め綾菜はもじもじし始める。

怪しく思った海聖は本音をぶっちゃけた。

「俺をここに住ませてくれるからここまで運んできてくれたんじゃないのか？」

「へっ？」

自分の思っていた考えと全く違ったことに言葉を失う綾菜。

いい加減なところでも呆れたがこうさらっと図々しくこのセリフを言えるのはある意味すごいと思う。

「そ、そういうことね」

彼女は顔を引きつりながらも多少の安堵感と、少し残念な気持ちになっていた。

「なんか変なこと言ったか？」

「もういいわ・・・いいわよ。どうせ此処に連れてくる男もいないし。それにあなた、私の命の恩人だしね」

「了解した。では存分に図々しくさせてもらう」

そう言いだすと彼はリビングで寝始めた。

「本当に図々しいわね」

さっきのいい奴ってのは前言撤回ね・・・

こうして二人の奇妙な生活が始まった。

#3　覚えていない

「俺は能力者です」

あの日、赤薙綾菜は意味のわからない電波少年と出会った。
背中に翼を生やした天使のような・・・

「はぁ～あいつどこ行ってるのかしら？」

だいぶ前に“出ていきます”と言ったきり戻ってこない。
取りあえず最後に戻ってきますので心配無用ですとは言っていたが・・・

「何を起こすか解らない！！」

そう、彼が心配なのではない。彼がする行動によってどれだけの被害が出るか・・・
考えただけでもぞっとする。

まず、はじめに見た行動。一個中隊規模の中国軍を数分で圧倒した力。
その後の普通の人間と思えないほどの図々しさ・・・あの最初の礼儀正しい態度の優等生雰囲気全開の裏はこんな物か・・・

次に見た光景は私の通う高校。日本人学生に暴行をしていた中国人学生を瀕死寸前まで追い込んだ。まだ、あいつがやったということはばれていないが・・・

「神よ・・・被害者が出ない事を祈ります」

多分その願いは届かない。そう分かっていながらも無駄に天にお祈りをした。

その頃

――――――ＳＴＯ北日本本部

ビル換算にして４０回程度はありそうな高層タワー。周りは数メートルの塀と数百人の軍人、戦闘車両に、ＬＷと呼ばれる人型兵器にタワー内では無人警備システムと無人兵器により厳重に警備されている。

なぜなら、ここは北日本を管理しているＳＴＯ（実質中国）の北日本での政治の中心であり、また軍事の中心でもあるからだ。

そんな物騒な建物内ではＳＴＯ北日本統括委員会による緊急会議が行われている。

「これが例の映像です」

背中に漢字で中華人民解放軍と、下にはＳＴＯと書かれた兵士が怪しげな電子機器をいじると、真っ暗な円卓会議上の中央部に立体映像が映し出された。

「ほほう、これが例の新型完全自立機動型戦闘用アクトロイドかね？」

アクトロイド・・・大日本国の企業有限会社ココロと大阪大学が共同開発した完全自立機動する人型ロボットである。

２００５年の愛・地球博で初めて国際的に公開されたロボットだ。２１世紀初期には戦闘に使えるほどではなく、あくまで娯楽の範囲のロボだったが、プログラムを書き換えたアクトロイドにアメリカ軍のパワードスーツをつけたところ、革命的に進化した兵器となった。

今では体中に重装備を加えた挙句、爆発反応装甲まで取り付け、対戦車ロケットでも倒せなくそこらのテロ組織壊滅に投入されたりする。だが、一機当たりの単価が高いのが問題だ。

とはいえ、それが戦場の第一線の戦術を見直されるほど変えるかと言えばそうでもない。テロ組織など正規軍が手を回せない時には一機投入するだけでほとんど壊滅させてくれるが大国間同士の争いでは役に立たない。

だが、この映像は違う。

「取りあえずその路線で考えています。ただ、不可思議なのがこの背中部分に生えている翼。体内から重火器を取り出し我が軍をせん滅した事には話が合うのですが・・・」

「天使とでも言うべきか？」

「ふっ、そんな馬鹿な・・・アメリカと日本が天使の共同開発でもしたと？」

「あくまで空想の話にすぎん。だが、映像を見た感じ機械的な動きを見れなかった。ということだ」

「そこなんです」

人民軍の兵士が指摘された事について説明し始める。

「この翼の動き・・・機械というよりも人工的に作り上げた筋肉と言った方が正解だと。更に言わせていただきますと、この時装甲車を止めているのは翼なんですが・・・」

「そんなもん見りゃわかる」

「翼を羽ばたきもしていないのにどうやって浮かんでいるか・・・足元や腹部に何かあるのではと映像解析に回してもらったのですが・・・全く見当たらないとのことでした。」

「つまりなんと言いたい？」

「いえ、これは途中経過の報告なので何とも言えませんが・・・これが我々の脅威対象になるということを肝に銘じてほしいのです」

「ならば・・・・そうだな。ソ連が開発したＳＴＯ正式採用の最新式のＬＷと戦えばどうなるんだ？」

「ＬＷですか・・・」

解放軍兵士は言葉を詰めた。さすがにそこまでは考えていなかったと。

ＬＷというのは正式名称ＬＡＮＤ　ＷＡＬＫＥＲで、日本の機械メーカー榊原工業がアミューズメント用で開発した疑似二足歩行ロボットを戦闘用に本格的に改良した兵器である。つい最近戦場の最前

線立ち始めたが、値段が値段で戦車や装甲車などがまだまだ主力だが、後５０年もたてば第一線の主力として投入され、戦車などが完全に旧式と化し第一線からはほとんど外され、後方支援に回されるだろうと予測されている。

ＮＡＴＯはＬＡＮＤ　ＷＡＬＫＥＲを年々改良し続け、今となっては最新鋭の戦車５両と同時戦闘を行い勝てるというシミュレート結果が出ているほどだ。

「そこまでは考えていませんでした。しかし、これだけでは実力が完全に把握できないため未知数ですが現状況下ではＳＴＯ軍のＬＷと互角かそれ以上に戦えるでしょう」

「そんなに！！」

委員会の連中の顔は青ざめた。いまだ未知数で、現状況でそれ以上。現在最前線に立たされる戦車の値段は平均１０億程度だがＬＷは世界平均で２００億と、戦闘機以上の費用がかかる。そんなものをぼかぼかと倒されてはすぐに軍隊は破産するだろう。

「それともう一つ」

「もう一つ？」

委員会のメンバーの一人は怪訝顔して、人民解放軍の兵士に聞く。

「これについてはよくわからないんですが、生き残った兵士・・・つまり現場を見た兵士に聞いたのですが、これについての事を全く覚えていないということです。」

「覚えていない？そんな馬鹿な」

鼻で息を鳴らして信じようとしない委員会メンバーと、本気で深く考えるメンバーの二つに分かれた。

「そこで我々人民解放軍からは、警戒態勢を怠らないよう注意をしておいてくださいこれにて失礼します」

そう言って頭を下げた人民解放軍兵士は扉をあけて出て行った。

「ふっ・・・これが人間のすることか？」

そこには体中から無数の重火器を露出し人民解放軍を圧倒する海聖の姿だった。

「このウェノムが！！てめえらは道路の隅を這いずり回って歩け！！」

「堂々と真ん中歩いてんじゃねえ！！」

「がはっ！！」

ただ普通に道路を歩いていただけなのに他国の連中に暴行を加えられる日本人男性。

ちなみにウェノムとは朝鮮においての日本人に対する蔑称。

今では北日本にいる日本人全員の事を指す。

「す、すいません」

「ああ？聞こえねえぞ！！」

「すいませんって言ってるんだよ。あなた達の耳何処か悪いんじゃないですか？」

ふと後ろから聞こえた声に振り向く３人のＳＴＯ加盟国の人々。一人白人が混ざっているところからソビエト人だろうとたいてい予想がつく。
明らか敵意むき出しで睨みつけてくるＳＴＯ人達。だが、海聖はそれを露骨に無視して暴行された日本人に手を貸す。

「大丈夫か？」

「は、はい」

「はやくこの汚物達から逃げたほうがいい」

そう言って海聖は名前も知らない日本人男性を助けた。
その後ろには挑発を露骨に無視され挙句の果てにはイライラ解消道具を逃がされたことにむかむかしている３人組。

「どうした？」

「て、てめえ・・・ウェノムのくせに生意気な・・・」

「ウェノム？俺は日本人だが？朝鮮語は受け付けないので・・・」

「ここは俺達ＳＴＯの物だ。てめえらウェノムは地面を這いずり回ってろ！！」

我慢が出来なくなったのか中肉中背の男が手を上げる。

「・・・地面を這いずり回るのは貴様らだ！！」

飛んできたこぶしを右手で受け止め腕をひねる。痛みにこらえられず態勢を崩し叫ぶ男を容赦なく蹴りつけ、うつ伏せになった状態の男の顔面を踏みつける。

「ほら、這いずり回った！！いや～一度こういうのやってみたかったんだよね。なんかこう、泣け！！叫べ！！わめけ！！みたいな・・・・・・・消え去れ！！」

突然テンションを変え、冷徹な目と変わり果てた海聖は踏みつけていた足を突如とドリルに変える。

「どうされたいか？」

「ひっ！！い、命だけはた、助けてくれ！！」

「俺たち日本人は貴様らの奴隷でもない。ウェノムなんて名前にもなった覚えはない！！俺たち日本人は日本人だ！！」

ドリルに変えた足を男の顔面に突き刺す。

「あｋｇｇのいｒんがｇん；」

言葉では表しきれない、文字化けしそうな声を張り上げ、男の顔は

見るも無残にグチャグチャになった。

「に、逃げろ！！」

「逃がすか！！」

翼をはやして、手を刀に変えた海聖は逃げまどう男たちを切り刻んでミンチに変えた。

その後3人組を見た人は誰一人としていない。

「ちょっと！！遅い！！何処行ってたの？」

帰ってきた途端いきなり心配してくる綾菜を見て海聖はすごく疑問に思う。

「なぜ君がそこまで俺の事を心配するのかよくわからないのだが・・・」

「ち、違うわ！！あんたは強いから心配する必要はなし。他の人よ。何かしてきてないでしょうね？」

ぎろぎろと綾菜は海聖に容赦なく眼飛ばしてくるが、さらりとスルー。

「ちょっと！！」

「そうだな・・・あえて言わせておけば、人助けか？」

紙の視点で見ている我々からしてもらおう人助けもしたが人殺しもしていると・・・

「ひ、人助け？」

「そっ、人助け。人助けのためにする道路の掃除は気分がいい」

さわやかにそう答えると海聖は図々しく布団に寝転んだ。

「・・・変な奴」

#4　エンジェル狩り

――――ＳＴＯ軍北日本司令部

迷彩服に赤味の掛かった迷彩帽をかぶっている兵士が司令部を包囲するかのごとく護衛している。名目上日本を管理しているのはＳＴＯだが、実質中国であり、ＳＴＯ軍兵士と言っても多国籍軍というわけではなくほとんどが中国人で、ソ連人や朝鮮人、他国の人がいるのは北日本統括委員会のメンバーと一部地域の部隊だけである。割合的に中国人：他国は７：３と海と地の割合と一緒である。

そして、ＳＴＯ軍という名の実質中華人民解放軍の司令部を護衛している兵士がある話をしている。

「エンジェル狩り？」

二人組の兵士のうち背の高い方が何の事だかわからずに聞き返してくる。

「ああ。まだれっきとした作戦名は決まっていないが・・・この前の北日本人民解放戦線せん滅作戦の時」

「あれか、中隊規模の部隊が瞬間的にやられたっていう」

どうやら海聖が初登場時にぶちかました中華人民解放軍の事件は下っ端兵士までうわさが行きとどいているようだ。

「そう、それがアメリカと日本が開発した新型アクトロイドじゃないかっていう噂で、しかも人工的な翼が生えていたからその新型ア

クトロイドのコードネームがエンジェルっていうので」

「だからエンジェル狩りか・・・」

エンジェル・・・人民解放兵士からの話で分かる通り、新型完全自立機動型戦闘用アクトロイドと間違えられたパラレルワールドの日本からの救世主兼超能力者“核　海聖”の事である。

その頃

「へ、へっくち」

「・・・あんた身体の割にはかわいいくしゃみするわね」

今日は日曜日。とは言え、海聖のいつもの仕事は変わらず家事をしている。理由は住ませてもらっているということと、日ごろ暇人だからというわけである。

そして食事の準備を終え、二人で食事をしていたら前触れもなく彼はくしゃみをした。そのくしゃみの仕方がどうも本人と合わず、今風な言い方ならばギャップ萌えで、綾菜は爆笑している。黒のセミロングの髪をなびかせ中性的な顔を台無しにするその姿はあまり良くないとは、本人の前で言えない海聖だった。

「ねぇ？」

「なに？」

殺風景の部屋に置いておくのはもったいない二人の会話は家の情景

描写と同じく殺風景レベルだった。

「あんた、この日本を救うために来たとか言っていたわよね？」

「ああ。そんなこと言ってたな」

「言ってたなって・・・・やる気あるの？」

「いや、まだ行動に移すのは早いかと・・・この前は出てきた場所が悪かったから暴れてしまったが・・・」

初めて綾菜に会った時の事を思い出しながら海聖は答えるが、その答えが綾菜に機嫌を損なっている事に気がつくまでには時間がかかった。

「現れた場所に私がいて悪かったわね」

「いや、別に悪いとは一言も言っていないが・・・」

「で、これからどうするの？」

「取りあえず住む家は何とかなったが・・・さてどうしたものか？」

「私に聞かれても・・・」

確かにその通りである。なんの計画もなしに日本を救うという名目で日本に来て、現地人にどうすれば救える等と聞かれても解るわけがない。

結局今日彼は何もしないで半日以上を過ごした。

「・・・・成程。１９５０年極東戦争。この戦争で北日本軍がクーデター未遂を起こしたから独立を消されたのか・・・」

深夜２時。深夜零時から２時間過ぎたこの時間帯は、小動物どころか虫の音すら聞こえず、不気味なほど静寂に包まれていた。外の景色は戦争の被害だと認識できるほど荒れており、よくこの家が無事だったかと感心ものである。

彼自身学校がないとは言え、毎日朝晩のご飯の支度に、洗濯、食器洗い、掃除等家事の雑用をやらされている人間にとって起きている時間ではない。彼は何をしているか？

それを一番知りたいのは彼女だった。

「・・・んん。海聖は何してるの？」

眠い。ただそれだけ。顔を見ればわかるような表情をしている綾菜は僅かについている電気の光で起きた。

「ごめん。起しちゃったかな？」

「ん？私の教科書・・・」

海聖が向かっていた机の上にはＳＴＯに統治されている北日本の学校の教科書だった。取りあえず４か国語対応で中国語、日本語、ハングル、ロシア語。

「ああ、これか。今のところ何もできないから、せめてこの世界の

歴史ぐらい見ておこうと思ってな」

「そっか・・・何も考えていないようで考えているんだね」

「失礼な。これでも元の日本では成績優秀だったんだぞ？」

「元のでしょ？じゃあ、海聖も無理しないで。だからと言って朝ご飯抜いちゃ駄目だよ。ちゃんと作ってね。お休み」

「ああ。お休み」

教科書を見る限り俺が聞いていた日本と一緒だ。大国間の争いに巻き込まれ、そのうち北日本は占領されている。その日本を救え。喜んで志願した。でも、そんな世界でも、こういう温かい世界があるのかと、海聖は一人夜遅くに感心していた。

「報告があります」

ＳＴＯ軍北日本司令部の指令室に赴くエンジェル対策本部長。この前の会議の時に説明していた解放軍兵士である。

「ああ、君か。何の用だ？」

「エンジェルについての新しい情報です！！」

まるで「キャプテン！！宝を発見しました」とでもいいそうな輝かしい目とそのにこやかな表情はＳＴＯ軍北日本司令官の興味をそそ

るのに十分だった。

「どれだね？」

そう言われた途端に本部長はパソコンの画面を司令長に見せつける。

「この動画は生き残った兵士が携帯で撮った動画です。撮った本人自身は前回の話通り全く覚えておらず、たまたま動画ファイルを開いたところこれを発見したそうです」

「・・・・エンジェルを運ぶこの少女・・・何者だ？」

パソコンの液晶に映る綾菜を指で指しながら尋ねる司令官に待っていましたと言わんばかりに答える本部長。

「地元の高校に通うウェノムの少女です。名前は赤薙綾菜。年齢１６歳。父親は思想犯として第４８次シベリア抑留に送られています。母親の方は重い病気にかかり病院で亡くなったそうです」

「あの忌まわしき第４８次シベリア抑留に送られた父親の娘か・・・・成程。エンジェルとつながりがあるということは何か知っているわけだな？」

「いえ、そこまでは・・・そのために独自の作戦思案と決定、実行の権限を許可していただきたいのですが・・」

「・・・・エンジェル。こいつはこれからの戦争の最前線での戦術を見直させるほどの革命的な物だ。どれだけの費用がかかってもいい。人を失ってもいい。確実にこいつを仕留めろ！！そして捕獲しろ。いいな？」

「了解」

司令長に敬礼をすると本部長はすぐさま対策本部に戻った。

「あれを手に入れれば我が軍も・・・」

そこにはほくそ微笑む司令長の姿があった。

#5　拉致

「お～い・・・・起きろ・・」

「あと5分」

ベッドの隣ではエプロンをかけた何とも似合わず面白い姿の海聖がいる。
一方海聖の隣にあるベッドに寝るのは海聖が居候している家の主。中華人民解放軍に殺されそうになったところを海聖が助けた少女赤薙綾菜。

「・・・・これ何回目だ？」

「一回目・・・」

海聖は指を折って数えだす。勿論その数は綾菜が「あと5分」と言った回数である。

「お前は数さえ数えることもできないのか？」

「う～ん・・・・・・はっ！！やばい！！遅刻する！！」

自分が何回「後5分」と言ったかを思い出し、あわてて起き出す。あえて海聖も言わなかったが確実に１０回以上は同じ言葉を繰り返した。単純計算で５０分と思うかもしれないが、海聖が5分おきに何回も起こしに行っているのである。つまり一時間は寝ていたということだ。

こんな光景も本当は海聖が来るまでなかったことだ。綾菜は一人暮らしだったためいつもちゃんと起きていたが海聖が来てからは家事をすべてやってくれるから安心して朝寝坊している。

「何で起こしてくれなかったのよ！！」

海聖という性別上男、いや普通に男がいるのにもかかわらずパジャマを一気に脱いで裸になって制服に着替え出す。
綾菜の身体には控えめながらも綺麗な白いふくらみとピンク色の突起、下は派手じゃないが、上品さを感じさせる下着姿があった。
遅刻しそうな綾菜に羞恥心という言葉は一かけらもないようだ。
そんな綾菜を傍で見ている海聖は最初こそびっくりしたものの、もう慣れた日常の風景だった。

「俺は１０回以上起こしに行った。お前が毎度のこと後５分と連呼するのが悪いだろう？」

「そ、そそそ、そういうときは・・・・そういうときは・・・・そういうときは！！」

「そういうときは？なんだ？」

「う、うううう、うう、海聖の馬鹿！！」

全くもって間違ってはいない真実を告げられた綾菜は言い返そうにも言い返せず、でも認めたくない気持ちで無理やり反論をしようと思ったが、海聖の思っていた通り何も言い返せなかった。

結局海聖が朝に作ったサンドイッチを口にくわえて急いで走り去って行った。

「ったく・・・朝からうるさい奴だな」

後ろを振り返らないで走っていく彼女を窓から見送りながら、ふと机の上をみる。

「あっ！！」

そこにあったのは・・・

「体操着・・・・」

昨日の夜、明日体育あるから用意しておいてと言われた海聖は女子用の体操着を机の上においてあると彼女に伝えたはずだったのだが・・・

「ものの見事に忘れて行きやがったな・・・」

一言でいえば忘れ物をしたということである。

「あちゃ～間に合わないかもしれない・・・」

現在の時刻８時５分。登校時間は８時１５分までだ。綾菜が今いるところから全力で走って１０分弱。校門までは間に合っても、教室までに間に合うかどうか。

「！！」

綾菜は突然飛び出してきた車に足を止める。

「もう！！何なのよ。早くどいて」

綾菜の通学進路妨害を犯している車にはＳＴＯの三文字。糸魚川構造線を境に北日本を占領している組織だ。現在糸魚川構造線・・・ＳＴＯとＮＡＴＯとの国境付近においての紛争は未だに大規模衝突は起こっておらず、小規模な発砲程度に終わっている。だが、いつ大規模な衝突に発展するかわからない。

「君が赤薙綾菜さんでよろしいかな？」

ＳＴＯと書かれた車から出てきたのは長身の白人。多分ロシア人だろう。

綾菜は目つきを変え、ＳＴＯの人間をにらみつける。

「・・・ＳＴＯの人が私に何か用ですか？父は抑留されたためもういません。失礼します」

「おっと・・・」

「うっ！！」

面倒だから放っておこう。そう思って逃げ出した綾菜はすぐさまに腕を掴まれる。

「まだ君に行かれちゃ困るんだよ。エンジェルについて話してもらわないと・・」

「！！」

男が懐から出した一枚の写真。そこにはよく知る人物が写っていた。

「さあ乗るんだ！！」

「いやっ！！離して！！」

「少し黙ってろ！！」

「あっ！！」

体中に響くビリビリとした感覚。そして、綾菜は意識を失っていった。

「てこずらせやがって」

懐から出したのはペンタイプのスタンガン。

「さあ、行くぞ。早く走らせろ！！」

ＳＴＯと書かれた車は綾菜を連れ去るとすぐさまに逃げ出すように走り去って行った。

そして、綾菜に見せた写真に写っていたのは圧倒的な火力でＳＴＯ軍を蹂躙する海聖の姿だった。

「ったく・・・そろそろ見つかってもいいんだけどな・・・」

メタモルフォーゼによって翼を生やして上空で探し出そうにも見つからない。綾菜が家を出てから1分もたたないうちに外を出たから見つかってもいい頃なのだが・・・

「ん？」

ふと見つけた道端に墜ちている鞄。

「なんだ？」

気になってその場に降り立つ海聖。

「誰のだろう？似たような鞄を見たことあるんだが・・・」

人の荷物をあさるのは良くない。一般的な常識だが、取りあえず中を見てわかる。

「綾菜の鞄だ。しかし、何故？」

綾菜の鞄を持って気になりながら周りを見渡すと一枚の紙が落ちていた。顔写真が張られている所から名刺なのだろう

「なになに？」

・・・ロシア語で読めません。

「しょうがない。メタモルフォーゼ！！」

メタモルフォーゼの能力により脳みそをスーパーコンピューターに変身させ、ネットワークを介して翻訳する。

「・・・・久しぶりにこれやったからあれだけど、ちゃんと読めるぞ」

在住北日本ＳＴＯ軍特別調査課エンジェル対策本部
エヴゲーニイ・クラスノフ大尉

こんなところに不自然に鞄を置いていくこと自体がおかしい。
さらにこの名刺。

「成程な。取りあえず・・・綾菜をさらったのがこの人だということは解った。だが・・・」

エンジェル対策本部とは何なんだ？
エンジェル・・・天使ということは解るが対策・・・わからん。
ひどく困惑する海聖だが、困惑している間に時間はどんどん過ぎて行き・・

――――――思想犯収容所
ＳＴＯのやり方・・・社会主義に対する反抗的思想を持つ者、または反抗的な攻撃を繰り返す者は思想犯とみなされ収容所で尋問されたり、強制労働に送られたりする。

「っぷは！！」

「どうだ？吐きたいなら吐いてもいいんだぞ？」

「はぁ、はぁ、わ、私は、アクトロイドなんて知らない！！」

「まだ言うか！！」

「あぁぁぁ！！」

綾菜は今思想犯収容所で拷問という名の尋問を受けている。
ついさっきまで死なない程度に水の入った洗面器に何度も顔を押し付けられ、少しでも口答えすると後ろに立つ男に鞭打ち。椅子に座ったまま紐で縛られているため身動き一つできない。

「・・・・この反抗的な小娘め！！親父の血を受け継いだか？」

綾菜の父は思想犯としてここに収容されそして第４８次シベリア抑留に送られた。
そこで栄養失調と寒さによって死んだと聞かされた。

「お父さんの悪口を言うな！！」

「だまれ！！」

「がはっ！！」

椅子に縛られたまま立ち上がった綾菜は後ろに立つごつい男に顔を掴まれ机に叩きつけられた。

「こっちが手を出さないのをいいことに・・・・って気絶しちまったか・・・まあいい。今日はこれぐらいにしておこう。死なれた方が困るしな。明日再開だ」

「はっ！！」

そう言うとげらげら笑いながら牢屋から出て行った。

「う、うううう・・・誰か助けてよ・・・海聖・・・」

その声は誰にも届くことはなかった・・・

#6　救出

「・・・ネットワーク侵入開始・・・検索・・・エンジェル対策本部」

今や脳みそがスーパーコンピューターとなった海聖はＳＴＯのネットワークに侵入し“エンジェル対策本部”を検索している。

「・・・“エンジェル対策本部”各当３件・・・エンジェル・・・北日本人民解放戦線せん滅作戦時に現れた新型完全自立機動型アクトロイドのコードネーム・・・写真閲覧・・・俺の事か！！」

脳内描写された写真は明らか自分だと解るような写真だった。

「・・・動画・・・ああ、あの時のか・・・成程・・・ん？」

脳内再生された動画の最後には綾菜が海聖を運んでいる姿が映っていた。

「成程・・・これで俺はあいつの家にいたのか・・・まてよ？」

“エンジェル対策本部”・・・それはコードネーム“エンジェル”と呼ばれる新型完全自立機動型アクトロイドと思われている海聖の対策を練るために設立された物。

海聖についての情報が少ない以上、調べなければならない。

つまり、エンジェル対策本部の連中にとってはこの動画に映っている綾菜を取り押さえればいい。

そして彼女から情報を聞き出す。

「・・・・マジか！！探さなくては」

海聖が色々調べた結果、ＳＴＯがしている事はアメリカがしていること以上に非人道的だ。
自分達に逆らう者達の情報を仲間から聞きだすためには死なない程度に殺す。殺人未遂にあたる程度の事を繰り返し、思想犯の烙印を押された物はシベリアへ抑留される。そしてシベリア開拓のためにこき使われる。

シベリアの開拓された土地は人口超過を起こしている中国人の新しい土地となる。中国人の繁殖の仕方はゴキブリレベルだ。

「もしかしたら綾菜も・・・」

エンジェルの情報を聞きだすためには殺しはしないが相当ひどい事をしているに決まっている。ましてや日本人を恨んでいる中国人や朝鮮人のやることだ。爪をはいだり、歯を抜いたり・・・別の方面へ行けば強姦もあり得る。

「そんな事はさせない！！」

海聖は脳みそをフル稼働させる。
あさる所はＳＴＯ北日本支部のコンピューター。その中からエンジェル対策本部についての情報を探り出す。

「エンジェル対策本部・・・重要参考人物もしくは調査活動について、またはそれと酷似した内容へ絞り込み検索・・・・・」

傍から見ればさっぱり意味のわからない事を言っており、いわゆる電波人間という烙印を押されてもおかしくない状況なのだが、海聖

はまったく気にせずブツブツとつぶやく。

「見つけた・・・重要参考人については思想犯収容所において尋問をせし・・・・成程」

ならばすることは一つ。スーパーコンピューターと化した脳みそをこれだけうまく使う方法はないだろう。

「クラックする・・・ＳＴＯ本部・・・・ＳＴＯ北日本支部・・・思想犯収容所・・・」

ＳＴＯ本部のコンピューターをクラックしそこからさまざまな情報から
思想犯収容所という単語を絞り込む。

最終的に行きついた思想犯収容所。どの収容所にも思想犯管理のために監視カメラが仕掛けており、警備室のモニターで全て管理できるようになっている。

「・・・・これじゃない・・・・これじゃない・・・」

日本中の思想犯収容所に映る監視カメラをその情報処理能力を活かし、確認中である。
どこに綾菜がいるかを・・・

「いた・・・・綾菜が泣いている」

海聖が探し出した監視カメラの動画には、拘束服を着せられ、椅子に縛られ、泣いている映像だった。海聖は無意識のうちに手を握っていた。その手は汗でしめっている。

「待ってろよ・・・・場所は・・・・・この近くか・・・」

その頃

――――思想犯収容所

（なんで？私達がいつ悪いことしたの？ここにいる人たちがいつ悪いことしたの？）

あちらこちらで聞こえる平手打ちのような音。そしてそれに続く叫び声。

地獄――――――

人々は厳しい責め苦を受ける世界を地獄と呼ぶ。綾菜がいまいる思想犯収容所は正に人々が地獄と呼ぶ世界に一寸の狂いもないだろう。

「た、助けてくれええ！！！」

「吐け！！」

「ぎゃあああああ！！」

ビシビシと鞭打ちの音や鈍器で殴るような音が絶えず聞こえてくる。綾菜は聞きたくないと願っても聞かざるをえない。なぜなら手足は椅子に縛られているからだ。寝たくても眠れない。耳を塞ぎたくても塞げない。

（海聖・・・・）

一か月と数週間位しか過ごしていないけど、彼がいた日々がどれだけ幸せだったか、彼女はその世界と離れて実感した。

（助けてよ・・・）

綾菜は今何もしゃべれない。下を噛まないように口の中に猿轡（さるぐつわ）を噛ませられている。

そんな届くはずもない願いは、何処かで運命の歯車を回していた。

たった一つの鞄と一枚の紙によって・・・

（・・・何この音？）

無数に聞こえる乾いた音。それに続く叫び声。しかし、その声が独特だった。

（・・・・日本人じゃない？）

「た、助けてくれえええ！！」

ふと、綾菜が閉じ込められている牢屋の前を四つん這いでのたうち回る警備兵。

「ひ！！し、死ねえええ！！！！！！」

怒り狂ったように銃を乱射する警備兵。残念ながら綾菜のいる位置からでは警備兵が何に恐れて発砲しているのかが理解できなかった。

「や、やったか・・・」

目の前の男・・・名前も知らない、知りたくもない警備兵の顔は安

どに満ち溢れていたはずだった。その笑顔は僅か数秒で崩れ去った。

「悪いな・・・俺のこの翼はそう簡単に破壊されないぜ。とりあえず、綾菜を返せ！！」

背中には巨大な翼。腕はガトリングガン。左手には速射砲。そして体内に内蔵された無数の兵器。海聖は自分の能力“メタモルフォーゼ”を無駄なく使いこなしていた。

「ぐわあああああ！！」

綾菜の目の前でハチの巣にされた警備兵はもう二度と動くことはなかった。

「綾菜・・・・大丈夫か？」

「ふがふが・・・・」

猿轡のせいでまともに喋れないのに、さらに泣いているため余計に何を言っているか解らない。

「・・・感動の再会がこんなんじゃ台無しだ。今牢屋を開けてやる」

そう言うと海聖は牢屋の鉄棒を握りだし曲げ始める。その動作にはさすがの綾菜もびっくりしていた。

「ぷはっ！！」

海聖は牢屋をこじ開け拘束されている綾菜を解放する。

「大丈夫か・・？」

「はぁはぁ、だ、大丈夫なわけないでしょ！！！！」

綾菜は何故か海聖に八つ当たりをしてとびついてくる。

「おいおい、いきなり飛びついてくるなよ」

「うううう、うう、うう、うううう・・・・ううわあああああああ」

「・・・・もう大丈夫だ。安心しろ」

いつもの日常では考えられなかった。泣き叫ぶ綾菜の身体を抱いた時、彼女の身体がこんなにも小さいとは・・・

「こ、怖かったよ・・・・さみしかったよ・・・・嫌だったよ・・・・」

「ああ・・・よく頑張ったな」

「うううううう・・・ひぐっ・・・・・」

「おいおい、そんなに泣くなよ。顔がぐしゃぐしゃだぞ」

「だ、だって、だって・・・海聖が・・・助けに来てくれるなんて、思ってもなかったから」

苦しい思いをしていたやつには悪いと思っている海聖だがそのセリフ・・・彼にとってはものすごく心外な発言だったということに綾菜は気づいていなかった。

「俺がそんなに頼りなく見えるのか？」
「そ、そんなこと、言って・・・・ない？」
「何で疑問形なんだよ」
「う、うるさい！！なんでもないわよ」
「よかった」
「えっ？」
「だって・・・お前が元気でいてくれたから」
「・・・えっ？」
泣きべそかいてた顔の頬が一気に真っ赤に染まっていく。その風景が面白くて海聖は笑い出す。
「な、な、なによ！！」
「別に？さっ、行こうぜ？」
「どこへ？」
「・・・・・・」
「・・・・やっぱね」

海聖お得意の無計画計画。その無計画計画をある一人の少女が断ち切ってくれるとは彼らはまだ知らない。

――――――ＮＡＴＯ日本支部

「ここへ行きなさい」

「しかし・・・・」

「私の言うことが聞けないの？ＮＡＴＯとＳＴＯはこの間の北日本人民解放戦線の件で武力衝突に発展したんでしょ？ならこの国境の片隅くらい奪ったって問題ないわよ。ここら辺まで進軍しなさい」

「・・・・」

ＮＡＴＯ日本軍事委員会・・・北日本に駐在しているＳＴＯ軍に対抗するため南日本各地に点々と配置されたＮＡＴＯ軍の基地を管理する委員会。

その委員会の中でもトップのライマン・ブラッドレー大将の机の上に座って命令を出すのは身長１５０に満たない小柄の少女だった。

「返事は？」

「イエス・マム」

「そっ、よろしい。解ったならさっさと駒を進めちゃってくれないかしら？」

胸は綾菜みたいに控えめとかではなくつるぺたの完全ロリ体系のくせに言葉づかいは高慢ちきのお嬢様の風貌を漂わせているところがなんとも憎たらしい。周りの人間の誰しもが思っていただろう。

「私たちの多次元日本救済計画は誰一人として一ミリ足りとも邪魔はさせないわよ」

#6．5　閑話

「お前いつまで泣いてるんだ？」

「ご、ごめんね」

「いや、謝れとは言ってないが・・・」

「あの・・・・再会したばかりで悪いんだけど・・・・ちょっと席外すね」

「あ、ああ」

泣いていたやつが突然もぞもぞとした動作をして走り去って行った。

「なんなんだ？」

俺には女という生物が理解できない。笑ったり泣いたり怒ったり・・・喜怒哀楽が激しいというか・・

その頃

――――――思想犯収容所廊下

「はっ、はっ、はっ」

今私は人生最大のピンチを迎えています。
えっ？さっきの尋問の事じゃないのかって？残念です。それではありません。

「は、早くしないと・・・」

私は朝の８時から夜になるまでずっと尋問。まだ顔とか背中とかいろいろ痛いけど、今はそれどころではありません。なぜなら・・・

「も、漏れちゃうよ！！」

ずっと拘束されていて、身動き一つできなかった。トイレにも行かせてもらえなかった。
変態趣味どものあいつらは私が漏らすとでも思っていたのかしらね？
でも、さすがに我慢の限界。よく海聖と再会した時に気が緩んで洩らさなかったかと自分でも感心感心。

？

「遅いな？・・・１０分以上たったぞ？」

俺はスーパーコンピューター状態の脳みそで時間を確認した。

「・・・しっかし長いな・・・この時間ならトイレ行っても大丈夫か。うんこしたくなったし・・」

そう言うと海聖はトイレを探しに出かけた。

？

「はぁ、はぁ、はぁ、・・・・・なんで、トイレがないのよ！！」

海聖と別れてから１０分は経ったと思う。

いくら探してもトイレが見つからないのよ。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・だ、ダメ・・・も、漏れちゃう・・」

何でトイレが見つからないのよ！！

心の中で文句ブツブツ垂れていた私にも希望という物があったのね。

「あった・・・・男子トイレだけど」

この際仕方がない。プライドも捨ててやる。

男子トイレに入った瞬間ものすごい自分に対する失望感とかいろいろ混ぜ込んだ感情が心をうごめいた気がしたがそんなこともうどうでもいい。

「やった・・・・和式だけど・・・」

そう言うと綾菜は鍵もしないですぐ手前のトイレに入った。

「・・・トイレ発見」

海聖はそう言うと男子トイレに入って、すぐ手前の扉に手をかける。

「うんこうんこうん・・・・・こ・・・・・」

「えっ？・・・・・」

やべっ！！鍵閉め忘れた。

そう思った綾菜はすぐさまに扉の方を向く。そこにはよく知った人物が・・・・いた。

「「・・・・・・・・・」」

沈黙の１０秒。なんか・・・水の音が聞こえる気がするが・・・

「悪い」

ガチャン

「・・・・ひっひっ・・・・うわあああああああん！！！！」

「ご、ごめんなさい！！！」

俺は速攻で扉越しで土下座した。

「ひっく・・ひっく・・ひっく・・うわあああん」

「悪かった！！俺が悪かった。だから泣きやんでくれ！！」

必死の思いで俺は謝るがトイレの中にいる綾菜は泣きやんでくれず許したとは言い難かった。

「か、海聖に、み、見られ、見られた。も、もう、お、お嫁にいけない・・・よ」

「うっ・・・」

「海聖のバーカー！！死んじゃえ！！ひっぐ・・・えっぐ・・・馬鹿あああああ！！」

「悪い！！本当にすまなかった」

「ヤダヤダ！！絶対許さない！！」

もうやけくそだ。

「お嫁でも何でも取ってやるから許してくれ！！悪かった」

「ひっくひっくひっく・・・・えっ？い、今なんて、い、言った？」

「えっ？許してくれ？」

「いや、その前に・・・なにかすごい、事聞こえた気が・・・」

「何言ってたけかな？」

俺のスーパーコンピューターの脳みそでも忘れることあるんだな。

「・・・でも、なんか嬉しいこと言ってくれた気がするからいいけど・・・・・」

「良かった。なら早くトイレから出てきてくれ。俺大きい方したいんだ」

「トイレ・・・？ふーん・・・そう。他にトイレ開いてないってことよね？」

な、なんか綾菜さんすごいダークなんですけど・・・

「ああ、そうだけどってここしか大きいの出来ないから早く出てきれくれ」

「・・・・ダメ」

「はあ？ちょい待て！！俺に生き恥をさらせと？」

さすがに冗談が過ぎるんじゃないか？

「私は生き恥さらされたようなものよ！！あんたに・・・お、おしっこ知ってるところ見られたんだからね！！」

「それについては謝っただろう？」

「う、うるさい！！そこで自分の罪を償いなさい！！」

「ちょっと待ってくれよ！！やばい！！頭まで出てるから！！早く出て！！」

俺は必至に命綱にでもすがるような思いで懇願する。
だが、その願いはことごとく打ち砕かれた。

「ダ～メ？」

「そんな時にハートいらないから！！マジで勘弁してくれ！！」

「や～だ（＾＿＾メ）」

「ホントに俺が悪かったから、一生言うこと聞くから！！出てくれ」

「あら？人に頼む時にしては言葉遣いがなってないわね」

ドＳすぎます。ホントにドＳすぎますよ綾菜さん。

「ト、トイレをぼ、僕のためにあ、開けていただけないでしょうか？」

「却下！！」

「これでも満足しないのかよ！！」

「もう少し丁寧に言いなさい。名前と様が足りないわよ」

「あ、綾菜様・・・ぼ、僕のためにトイレを開けてはいただけないでしょうか？」

「ぷっぷっ・・・」

「・・・・・（こいつ・・・・・）」

爆笑してんじゃねえ！！

「なんか言った？」

「何も言ってねえよ」

「却下・・・」

「ちょっと！！」

こうして海聖は綾菜に２０分もトイレを開けてもらえず苦しみ抜いた末に立ち小用トイレでしたのは別の話。

#7　月見里　萌仁香

「エンジェル対策本部隷下エンジェル対策部隊“ルシファー”到着しました」

他の迷彩服を着ている人民解放軍とは明らかに違う重装備“強化外骨格”を着用している。海外だとＰｏｗｅｒｅｄ　Ｅｘｏｓｋｅｌｅｔｏｎと、日本国内一般では“パワードスーツ”と呼ばれる物だ。全長２ｍ５０程度の分類上服であり、他の兵士に比べると圧倒的なパワーを誇り、その特殊な装甲によって機関砲程度ならびくともしない。

「まっていたぞ。ＬＷ部隊は？」

「輸送に時間がかかっているため少し遅れます」

トラックの中からぞろぞろと出てきたまるでロボットのような兵士たち。だが、中はちゃんとした人間で、小型のガスタービンエンジンと油圧駆動で強化外骨格は動いている。

「そうか・・・ＬＷがなければエンジェルと戦うなど不可能だ」

エンジェル・・・それは天使。その天使が数週間前、ＳＴＯとＮＡＴＯの日本列島内の国境に舞い降りた。天使というよりは神とでも呼ぶべき力を発揮し、ＳＴＯ軍を圧巻した。
それに対抗するために作られた組織“エンジェル対策本部”
そのエンジェル対策本部内に作られた対エンジェル用部隊“ルシファー”

ルシファー
――――――神に反逆した一部の天使は堕天使となり、その長は元天使長暁の天使ルシファー。エンジェルに対するこじつけだろう。

「めんどくさいな・・・」

「あんたが無計画な計画をするからよ」

「しかし、何故ばれたんだ？」

ＳＴＯ本部から海聖がクラッキングした事が判明し、あさられたファイルを確認したところ思想犯収容所とその監視カメラに映る綾菜の動画からここにたどりついたというわけだ。

「いまさらそんなこと考えても無駄でしょ？ばれたものはしょうがないんだから」

「悪かったな。こうでもしないとお前を助けられなかったんだ」

「・・・ごめん」

「なんで謝るのさ？」

「え？だって・・・」

「今はそんな事よりもどうやってばれずにあそこまで行く事かだ」
海聖にとって暴れまくれば余裕だろう。だが、海聖が怖がっているのはそれが気付かれることだ。
「ばれずに？あれだけの事をすればもうばれているでしょ？だからあいつらは私を連れ去ったんじゃないの？」
綾菜はＳＴＯが海聖について聞きだそうとするためにさらわれたと思っている。別にそれで間違いはない。だが、彼女には肝心なところが抜けている。
「いや、本当はばれていないはずなんだ・・・あいつらがなんでお前をさらったかって言うと、誰も知らないのに、動画には俺とＳＴＯ軍との戦闘が録画されているからなんだ。誰も知らないはずなのに・・・だから、その時映っていた綾菜をさらったんだ」
「誰も、知らない？」
正直なところ綾菜には海聖の言っている事がさっぱり理解できていなかった。たぶん、こんなこと言われて理解できる人間などいないだろう。海聖が持っている能力について詳しく知らない限り。
「多次元日本救済計画に送られた俺、もしくは俺のいた世界の特殊な人間が持つ“超能力”は、いわば、他の人間には感じることができない別次元の世界を感じ取ることだ」
「別次元？２次元とか３次元とか？」
「まあ、それに近いが物理学的には証明されていない。この世界に

はない次元・・・この世界にないから数字で表しようがないということで虚数次元とか言われているけど・・・」

「詳しい事は解らないのね」

「ああ。それで、俺ら能力者が力を出す時は、専門用語だが“次元上昇”といって、別次元の力を感じ取るためにその世界と同じ世界にいることになる。つまり、次元上昇の瞬間さえ見られていなければ、彼らにはどうして次元上昇したか解らず、次元上昇を元に戻した時、次元上昇中の記憶が忘れられるんだ」

「ふーん・・・」

少し曖昧だが、とりあえず力を解放した時の瞬間さえ見られていなければ大丈夫だと。

「で、でも、私は？」

「綾菜には、出逢った瞬間に力を解放したから見られていたんだろう」

「だからか。でもこのまま突っ込めば動画とかに映って世界的に有名になるよ？」

綾菜の指摘は正しい。こんな化け物がいたとなるとＮＡＴＯ、ＳＴＯ共に奪い合い。もしくはいい感じで共同戦線張って殺しに来るかもしれない。

「それだけは避けたいな」

「この方面に敵が本当にいるんですか？」

「私に逆らうとでも言うの？あなたたちは私の指示に従っていなさい」

国境を超え、瓦礫だらけの廃墟を進む車両。戦車に装甲車、トラックや、フッ化重水素レーザーを搭載した戦闘車両やミサイル車両。さらにはＬＷまで配備されている中隊強の戦力だ。

ＮＡＴＯと下に書かれ上には日本と日の丸が描かれた指揮通信車に乗る若手の中隊長は頭を足蹴りされている。

彼の名前は宮下亮哉。

士官学校をごく普通に卒業し特に期待などされていなかったが度重なる国境紛争で、連隊のほとんどが壊滅した中、彼の小隊だけが地の利を活かし敵軍に被害を与えながらも敵陣から脱出したりなどの功績をたたえられ、２７歳で中隊をまかされている。部下の中には自分よりも年齢の高い兵士もいる。

だが、今彼を足蹴りするのは部下でも上官でもない。いわば部外者にあたるはずだ。

名前は月見里（やまなしもにか）　萌仁香つい先ほどまではＮＡＴＯ日本軍事委員会のトップであるライマン・ブラッドレー大将を足蹴りしていたほどだ。

「しかし、何でそこまでして思想犯収容所に行きたがるんですか？まあ、同じ日本人が殴り蹴り倒されている事を考えるとあれですけ

ど」

「私達“多次元日本救済計画メンバー”がどれだけこの日本に支援したと思ってる？兵器もそうだけど、私たちという人類を超越した新人類を提供したのよ？これぐらい命令聞きなさい」

「いや、聞かないというわけではないのですが・・・理由を」

「理由ね・・・私達が支援名目で送りつけたこの世界のＬＷ５０体を同時相手できるＬＷを５００体同時に相手できる究極の人間兵器がそこにいるのよ」

ＬＷ・・・正式名称ランドウォーカーは日本が開発した操縦式の戦闘用ロボットであり、大きさは４ｍ程度から２０ｍを超える物まで大小さまざまあり、陸戦兵器の王者を追求するため試行錯誤が繰り返されている。最新式の戦車を５両同時相手できるというシミュレート結果が出ている物を同時に５０体相手に出来るのを５００体同時に相手にできる。

「それって、超大国と一人で戦えるじゃないですか！！」

「ええ。それくらい彼は強いわよ。しかし、彼は自分一人だけここに来たと思っているから、こっちへ連れ戻してあげるのよ」

「ＬＷ部隊到着しました」

巨大なトラックから体育座り姿勢で運ばれてきた１０体ものＬＷ。
正式名称Ｂｅ－４７ヴェレス。
ソ連のベリエフ設計局によってつくられたＬＷで、ソ連製というのもあってかなり軽量化路線で作られており、シャープな曲線と人間に見立てた形の仕上がりが特徴的だ。
高さは１０ｍ前後で世界平均が９ｍと、世界と比べてもごく普通の大きさである。

「他の思想犯たちはどうしますか？」

「数年前のシベリア抑留の二の舞は嫌だからな。全軍を持って攻撃を開始せよ」

エンジェル対策部隊“ルシファー”の隊長は電子戦使用の指揮官専用モデルに搭乗しており、命令を下す。ＬＷ部隊と強化外骨格を着た歩兵部隊はその命令と同時に機械的に動き出す。始めに思想犯収容所に突入したのは歩兵部隊だった。

「突入！！」

その言葉と同時に思想犯収容所へ突入していく歩兵部隊。

「こちら異常なし」

「こちらもだ」

「もっと奥へ進むぞ」

慎重に奥へ進んでいく兵士。だが、彼らは一般常識にとらわれ過ぎ

て、命を落とすことになるとはだれも予期していなかった。

「異常なしか・・・・甘い！！」

「！！」

ふと天井から聞こえた声に上を向く第一陣の歩兵部隊。

「エ、エンジェル！！」

海聖は翼を器用に天井に食い込ませて蜘蛛のように待ち伏せしていた。

腹部に展開したいくつもの筒。これは別の日本で作られたレールガンで、彼自身あらゆる兵器の構造さえ理解していれば、どんな兵器でも生み出すことが可能である。

「死んでくれ」

腹部から放たれたいくつもの弾丸は強化外骨格を着用している兵士をいとも簡単に粉砕した。

「ふぅ～お掃除完了！！」

「うげっ・・・残酷ね」

口を手で押さえながら怪訝顔する綾菜。

「こうでもしないと。戦闘で手を抜くのは相手にも悪い。殺すなら苦しまず一発で殺してやるのが礼儀だ」

「それでもこれはね・・・」

再び無残にも殺された死体を見る。綾菜にとってＳＴＯの全てが憎い。それは確かなことで揺らぐ事のない信念。だが、ここに転がる腸や脳みそぶちまけて死んでいる姿を見ると・・・

「ドン引きよね・・・」

「なんか言ったか？」

「別に？」

「さっさと行くぞ」

そう言って外へ出た海聖と綾菜。だが、それが間違いだと気づくには遅すぎた。

「ん？」

いきなり目がくらむほどのまぶしい光に当てられた。

「翼を生やしている・・・・間違いない。エンジェルだ！！」

「やばい。ミスった！！」

こんなこと本気で思ったのは久しぶりだ。

目の前には海聖達を囲むように銃を構えるルシファー隊員達。

更にその後ろに並ぶは戦闘車両に変わって陸の王者になろうとしているソ連製ＬＷ　Ｂｅ－４７ヴェレス。

「・・・・綾菜」

「え、ちょっ！！何？」

いきなり綾菜を腕で抱きかかえる海聖。
いくら一緒に暮らしているからとはいえ、彼からこんなことされるのは彼女にとって初めてだった。

「目をつぶってろ。口を開けるな。舌をかむぞ！！」

「は、はい！？」

いきなりすぎて何を言いたいのかさっぱりわからなかったが、しばらくして気付いた。

「ま、待って！！危ない！！絶対死ぬぅ～～～」

「口を開けるな！！舌をかむって言ったろ！！」

綾菜を抱いた瞬間海聖は翼を瞬く間に羽ばたかせ、空へと飛んで行った。
彼にとってルシファーなど眼中にない強さを持っている。だが、それは一人で戦う場合だ。
綾菜という荷物がある以上彼女を危険にさらすわけにはいかない。
つまり戦略的撤退だ。

そしてその光景を見ていたルシファーの隊員たちは

「な、何なんだ？」

「・・・・はい？」

さっぱり理解できていなかった。ここは自分達が生きている世界なのだろうかと。

そんなあほらしい出来事に気を取られている最中に、

「！！」

指揮官専用ＬＷから壮大な爆発音が聞こえた。

「て、敵襲！！」

「エンジェルか？」

「いや・・・この攻撃。ＮＡＴＯ軍です！！戦力はＬＷ　５戦車３・・・その他もろもろ」

「うぐうう！！」

あちらこちらに散らばる瓦礫の中に隠れていた兵士は次々に対ＬＷ用ミサイルを発射しまくる。基本的にＬＷは戦闘車両に比べ機動性が高いため、広範囲に爆発する放射タイプとクラスター爆弾みたいに爆発と同時に何百もの子爆弾を散布させる拡散大部の二つがある。

ただいま放たれたのは紛れもなく後者だった。

「ちっ！！拡散タイプか！！」

「敵は歩兵だけじゃない！！」

何もないトラックから飛び出てきたＮＡＴＯ軍正式採用ＬＷ。通称４５式。２０４５年にアメリカとの共同開発を終え、配備された年にちなんでつけられた名前だ。

４５式は動き出したと同時に固定武装であるフッ化重水素レーザーを掃射し、ヴェレスを破壊しつくした。

ヴェレス自体そこまで弱くはなく、４５式とまともに戦えるはずなのだが、エンジェルに対抗するため機動性重視を意識しすぎたか、装備が貧弱になり万全な４５式に一矢報いることなく全滅した。

「あらかた片付いたな。で、これからどうしますか？」

「そうね・・・あそこで飛びまくっている天使を下ろしてくれれば話がつくんだけど・・」

萌仁香は足を組みながら空を高く舞い上がる天使を見ていた。

「あいつら・・・何でここに来たのか？」

「とりあえずお礼でもしたら？」

綾菜を抱きながら空から日本軍を見下ろす海聖は警戒しながらも地上へと降り立った。

「・・・・あなた達がなぜここにいるのかは分からない。だが、支援感謝する」

指揮官である宮下亮哉にお礼を述べ握手をするが彼からは、挨拶ではなく人物紹介から始まった。

「感謝をするならこの娘に感謝するといい」
そう言って指揮通信車から出てきたのは小学生高学年と思わせる身長の少女だった。
「小学生・・・・？」
「あんた！！また小学生っていたわね？」
「その声・・・・もしかして・・・・」
小学生位の低身長の少女はヘルメットを外した。
「久しぶりね。核　海聖」
「月見里・・・・・萌仁香・・・・」
「海聖・・・・誰？」
「俺と同じ超能力者育成施設にいたやつだ。まさか・・・・ここにいるとは」
海聖は言葉が出てこなかった。
だって、彼は自分しかここに送られたとしか思っていなかったからだ。
「なんて・・・・いい加減な計画ね。これで国家プロジェクトだから・・・・」

綾菜もあきれて言葉が出てこなかった。

#7　月見里　萌仁香（後書き）

評価を確認したらお気に入り登録数よりも評価人数の方が多いって・・・

どういうことなんでしょうか？

#8　新生活

「月見里　萌仁香よ。よろしくね」

「は、はぁ・・・」

月見里　萌仁香。年齢１６歳。海聖のスーパーコンピューター化した頭脳でスキャンしたところ身長１４６ｃｍ。子供だ・・・小学生だ。誰もが思う感想だ。

しかし、これでも地球を一極支配している日本の国家プロジェクト“多次元日本救済計画”の欠かせないメンバーの一人であり、超能力という人外な能力を有している数少ない新人類の一人である。

「それで、本当にそんなこと思ってたの？」

「う、うん」

「ばっかじゃないの？」

ただいま海聖は綾菜と宮下亮哉と呼ばれる多次元日本救済計画メンバーが急遽設立した日本陸軍特務部隊隊長、そして多次元日本救済計画の実質リーダー的な見た目小学生の月見里萌仁香の３人と一緒に綾菜の家にいる。

「いや、だって、そんな事聞かされてないし・・・てっきり俺一人で暴れまくって解決で終わるかと思ってた」

「・・・・・」

「・・・・・・」

「・・・・・・・・」

３人とも同じ意見。こいつ馬鹿だとか阿呆とかそういうレベルじゃない。

呆れて言葉が出ないのだ。

「・・・・ねぇ、海聖？」

「なんだ？」

半分呆れて半分憐れんでいる綾菜がある事を尋ねる。

「本当に・・・その、勉強的な意味で成績が良かったの？」

「ああ。脳みそをスーパーコンピューター化させているから、未解決問題である婚約数は無限に存在するかを１２秒で解けたぞ」

「あの時の話を出したか・・・さすが史上最強のカンニング王ね」

海聖の過去を知る萌仁香は額に指を当てて呆れが増している。

それに対し宮下と綾菜は何の事だかさっぱり。

婚約数が無限に存在するか？なにそれ、おいしいの？

「何を言っているのかわからないから、もう少し解りやすく言ってくれないかしら？」

「円周率を１０分かけて１２京ケタまで計算したぞ。ほかには曽呂利新佐衛門の指数関数の１年後の米粒計算を０．０００００００（以下略）２秒で演算したぞ」

指数関数。どんどん累乗になっていくやつね。たしか一日目は一粒。二日目は2粒。三日目は４粒。４日目は８粒って増えてって・・・４０日後には日本国内の米が無くなるという逸話だったかしら？

「あのね・・・海聖」

「なんだ？」

「そういうのをね・・・一種のカンニングって言うと思うよ」

一般的にカンニングとは自分の頭を使わず人のテストを見るというのが正解だが、今の世代計算機は小型化し手のひらサイズの携帯電話で計算ができるほどだ。

さらに言うと英語も国語、化学など、あらゆる科目が３Ｇ回線でインターネットがつながっている携帯で答えを得ることができる。

「カンニングとは、自分の力を使わずに卑怯な手を使って答えを得ることだろう？俺は自分の能力を無駄なく使い、それによって答えを得たのだ。これのどこがカンニングなんだ？」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

再び3人とも同意見。呆れて言葉が出ない。

「・・・あの核君。そういうのをチートっていうんだ。うん。他の人にはない力を使うこと自体が問題だと思うよ」

宮下亮哉。自力でここまで上がってきた彼はとてもとても為になる事を言うのだった。

「で、そこら辺はおいて、私達技術支援チームがここに来た以上、海聖を好き勝手にはさせないわ。海聖には私たちの管理下に置かせてもらうわ。文句ある？」

「いや、特にないが・・・」

続きを言おうとしたのだが海聖は言葉を詰まらせた。

海聖を管理下に置く。つまり目の見える範囲で海聖を置いておくということだ。

じゃあ、綾菜はどうなる？

俺がいなくなったら余計に危なくなるのではないか？そう考えていた。

再び拉致され、この目で現場を見ることはなかったが顔の傷、背中の細い傷跡。思想犯収容所でひどい事をされたのは見なくても解ることだ。

「でも・・・綾菜はどうなる？」

「えっ？」

いきなりの言葉で綾菜は動揺した。海聖がいなくなるような気をし

ていた綾菜だったが、まさか自分の心配までしてくれるとは思ってもいなかった。

「こいつが、思想犯収容所でひどいことをされていたのはその現場を見ていない俺でもあんたらでもわかるだろう」

綾菜はその言葉に唇をかみしめ下を向いた。

「こいつがこうなったのは俺の所為で、そして、俺達多次元日本救済計画のメンバーの所為じゃないのか？」

「・・・・・そうね。でも安心なさい。ここはもう北日本じゃないのよ」

「ど、どういうことだ？」

「カーテンを開ければわかるわ」

そう言って海聖はカーテンを開けて外を見る。

そこにあった光景は

「・・・・嘘だろ？」

「言った通りでしょ？」

ついさっきまで俺達を助けてくれた特務部隊しかいなかったはずだった。

だが、上空には埋め尽くすばかりの爆撃機とヘリ。そして地面には埋め尽くさんばかりの陸上部隊だった。

「そんな、音は聞こえなかったぞ？」

普通これだけの大軍が進軍していれば大音量で聞こえるはずだ。更に言えば、住民たちがその姿を見て騒ぎだすだろう。

「消音装置や光学迷彩でもつけていたんじゃないかしらね？」

「ＡＣＭか・・・」

ＡＣＭ・・・Ａｔｔａｃｋ　Ｃｏｕｎｔｅｒ　Ｍｅａｓｕｒｅの略で日本語に訳すと攻撃妨害装置。

その中に光学迷彩や消音装置が含まれる。

両方とも敵軍が攻撃をするための証拠を消し去る物だ。光学迷彩は姿を。消音装置は音を。

証拠がなければ敵は攻撃をしない。つまり敵の攻撃を未然に妨げる。そこから攻撃妨害装置と付いたのだろう。

「これも多次元日本救済計画の支援品の一つよ。この前の小規模な武力衝突は大規模な武力衝突に変わるわ。そして、敵軍はこの新兵器により混乱。もう、ここは北日本じゃないのよ」

「・・・・・うそ？」

「本当だ。もう、ここは北日本じゃない。俺達の言う事を信じてくれ」

手を握り締めガッツポーズをとる宮下亮哉。その隣で小学生のように頭を撫でなでされる萌仁香。

「・・・やったな綾菜」

「・・・・海聖！！！！！」

「うをっ！！」

綾菜は嬉しさと感動のあまり海聖に飛びついた。本日二度目。

「よかった。よかった。これで、ここの日本人移住区の人たちも安心して暮らせる」

「・・・うん。よかったな」

そう言うと海聖は綾菜の頭を撫でた。

「子供じゃないよ！！」

「悪いな」

「でも、来るならもっと早く来てほしかったな」

「・・・・・ゴメンな。もっと早く来れば綾菜の父さんも母さんも助けられたのに・・・」

「いいよ。もう、過ぎた事だから。今は・・・平和な日本に暮らせる事だけでうれしいから」

「そっか・・・」

綾菜は他の二人に見られているという事を気にせず海聖に抱きつい

ていた。

「・・・お、ゴホン」

「「あっ！！」」

その恥ずかしさに気付いた二人は一気に背を向けてはなれた。

「若いっていいですな」

「あんたもまだ27でしょ。おっさんですか？」

なんだかんだいってこの11歳離れた犯罪レベルコンビも仲が良かった。

――――――2050年9月

大規模衝突がNATO（主に日本軍）の大勝利に終わりSTOの勢力を北海道と東北地方、北関東まで押し返し、首都であった東京を日本は取り戻した。STOは日本支部を札幌へと転居し、国境沿いでは大小の武力衝突が絶え間なく続いている。

「さぁ！！行くわよ」

「はいはい」

海聖は相変わらず綾菜の家に住み込んでいるが、前とは変った生活

をしている。
海聖は多次元日本救済計画メンバーによってつくられた特務部隊隊員の一人として、そして日本の学生として生活を始めた。

#9　決闘

２０５０年　９月２日
「何で俺が・・・・」
綾菜と俺は１６歳。普通この年齢なら高校１年生だ。
だが、俺は萌仁香と他の能力者たちと共に能力者育成施設で大学卒業までの勉強は一通りやった。つまり、今更高校の勉強をするなど意味のないことだ。
だが・・・
「はい？」
「いや、だから君も高校に通うといい」
俺は耳を疑った。いや、むしろ相手の言葉を疑った。日本語を間違えたのではないかと・・・
「何故？」
「だって綾菜ちゃんも通うわけだし・・・護衛でちょうどいいんじゃない？」
「いや、でも・・・」
「そんなに私と同じ高校に通うのが嫌なのかしら？」
「別にそんな事は言ってないが」

「ほら、綾菜ちゃんも核君がいないといやみたいだから」

「そ、そんなこと言ってません！！」

「それに亡命日本人ということもあるから、多分一人だと心細いと思うから」

「解りました」

というわけで俺は何故か高校に通わされている。

そして俺達が通うことになった星霜学園高等部は有名県立高校に落ちた人たちが必ず受ける私立高校なので、とりあえずここら辺では有名な進学私立らしい。

頭のいい連中だからどうか知らないが俺達亡命日本人に対する目はさほど厳しくなかった。

「俺、横川龍介。よろしく。北日本とここでは色々と違うから苦労すると思うけど何かあったら声かけてくれよな」

俺の隣の席の奴は特に警戒もせず俺らに話しかけてきた。

俺らというのも

「ちょっと頭下げなさいよ。見えないわ」

「悪い」

俺と綾菜が双子という設定で高校に通うこととなり、亡命日本人だ

からという配慮か同じクラスになった。

「しかし、萌仁香ちゃんはなんで前線から核君を外したの？」

「ちゃんづけはやめなさいって言ってるでしょ！！大佐と呼びなさい！！」

お子様扱いされたのがよっぽど気にくわなかったのか、萌仁香はこの地球にきて何度目か解らない足蹴りを繰り広げている。

「いていて、ごめんごめん」

「・・・・反省していないでしょ？これでも私の方が上官なのよ。敬意を払いなさい」

「はいはい」

何でこんな１１歳も年下の子に敬意を払わなきゃならないんだ？しかも、見た感じ１６どころか１２歳で通るのに・・・・とは言えない宮下だった。

「で、質問の答えね。私としても前線に出したいのよ」

「はい？」

「いや、聞き返されても・・・能力者育成施設については知っているわね？」

「はい。大佐から聞きましたので」

「その施設に通う全ての子供たちが遺伝子操作により社会復帰を目指し、覚醒した能力。それが超能力よ。私みたいな非戦闘の予知等の能力もあるけど、核　海聖の能力は全生徒の能力とはかけ離れていた」

「・・・・最強ということですか？」

「いえ、かけ離れていたとかいう問題じゃないわ。私達能力者は能力を使う際に次元上昇の話はしたわよね？」

「はい」

「次元上昇して、別次元を体感する事によってこの世界にはない物を感じ取りそれを扱う。彼は別次元を感じ取るとかじゃないの。海聖自体が別次元みたいなもの。いる世界が違ったわ。それを実感させられたのは戦闘系能力者として2番目の強さを誇った人との戦闘」

２０９６年夏　別次元の日本――――――能力者育成施設

後5年で２２世紀に突入という特にめでたくもない時期。
とある無人島を開拓してつくられた能力者育成施設で、生徒全員親のいない孤児や、社会復帰が厳しい子供たちだ。そして彼らには期末テストの一環として能力テストがあった。

様々な能力の中で、能力発動までどれだけ時間がかかるか？本来の能力をどれだけ引き出せるか？どれだけ応用が利いているか？この３視点から総合得点を競うのが能力テストだ。

「海聖！！海聖！！」

「ん～？なんだ小学生か」

「誰が小学生ですって？」

「で？眠たい俺に何の用だ？」

授業も終わり・・・・というより授業開始から爆睡していた海聖をたたき起したのは隣に座る小学生。らしき少女月見里萌仁香。

「期末の能力テスト一位。すごいじゃない」

「別にお前に上から目線で褒められても何にもうれしくないが・・・」

「こ、こいつ・・・・一回くたばればいいものを！！」

隣で怒りプンプンの少女を超える怒りが廊下の方から沸き出ていた。

「誰よこいつ。いつも、いつも私の邪魔ばかりして！！去年までは私が首席だったのに！！」

去年までとは、海聖がここに来たのは2年前。いまは中学3年で元々家庭環境に問題があり、それに伴うかの如く、住んでいた地域では小学生の時から有名な問題児で、中学1年で教師ですら手が負え

ないほどだった。

両親が死んだと同時に何か取れたかのようにさらなる暴走モードに入りあえなく御用。

社会復帰を強制させる能力者育成施設に送り込まれた。

僅か一年で彼は飛躍的に才能を開花させ、能力テストでは毎度のごとく一位を取るようになっていた。

「・・・海聖恨まれてるね・・・」

「誰が切れてるのか知らんけど・・・・自分の実力がないからって人に八つ当たりしないでくれよな」

「・・・・なんですって？」

あまり大きな声で言ったつもりはなかったが、廊下で沸騰中の彼女には聞こえたようだ。

あり一匹ならその視線で殺せるような強烈な視線を浴びせながら近づいてくる人影に海聖は身動きできなかった。

「あちゃ～めんどくさいのにつかまったね。じゃあ、私は知らないから」

「・・・・・特殊能力地獄耳ってところか？」

「違うわよ！！あんた・・・“自分の実力がないからって人に八つ当たりしないでくれよな”っていたわよね？」

「おお、よく一字も違わないで覚えていたな。感心感心」

明らか挑発的な態度、もしくは余裕をこいた態度が彼女の怒りをさらに加速させた。

「いわせておけば・・・・これは点だからよ」

「はっ？」

「実際の強さは差しで決まる物だわ。こんな点数で決めるなんておかしいと思わない？」

「別に？勝ちは勝ちだし」

「核海　聖とか言ったわね？そんなんで勝ってうれしいの？」

「いや、別に勝っているから・・・」

「そう、なら核海　聖は私の勝負から逃げた“負け犬”ってことで？」

「・・・そんな事は言ってないが・・・・ついでに“かくかい　せい”じゃなくて“さね　かざと”って読むんだけど・・・」

きゃー間違えてんの。恥ずかしーなんて声が聞こえて、俺もつられて笑いそうになったが、目の前にいる女の形相が！！ガタガタブルブルで・・・笑えなかった。

「・・・・・明日・・・グランド・・・集合しなさい。こなかったら・・・・」

「・・・・・・」

「返事は？」

「は、はい」

「待ってるわよ」

「・・・・・・」

俺は身体が硬直したまま女を見送った。

「はぁ～海聖も変なのにつかまったね。まあ、そこら辺は同情してあげるわ」

「そんな同情いらんわ」

こうして、謎の能力テスト第二位の少女に勝負を挑まれた海聖だった・・・

#10　第一位VS第二位ー前編ー

「明日の午前10時・・・グランド集合。か・・・」

能力者同士の戦闘は一般的に禁じます。それが施設内の掟の一つだ。だが、その掟にも例外というものが存在する。それは教師の許可だ。教員が立ち会って、安全を配慮したならば許可が下りる。更に言えば、第一位VS第二位の戦い。教師としては今後のデータとして欲しいだろう。

しかし海聖はそんな事はどうでもよくてむしろなぜ自分のメールボックスに見知らぬ人からのメールが来ていたことにびっくりしていた。

誰からメールアドレスを聞いたのやら・・・

なぜか俺のメールボックスに“神島（かなしまかざね）風音”と書かれたメールが届いていた。

「俺は教えた覚えがない・・・・」

誰だかわからず一瞬記憶喪失にでもなったかと思った。

「神島　風音か・・・」

海聖の顔を見た時の彼女はすごい形相だったが、本来なら悪くない顔立ちだろう。

だが、海聖にとってそんなこと考えている余裕はなかった。

「向こうは俺の能力を知っているのか？だとしたら彼女の能力を知

らない俺は不利ではないか？小学生に聞いても知らないと答えられそうだし・・・」

彼自身あまり友好関係が豊かというわけではなくむしろ乏しい部類で、登録されているメールアドレスは同じ学年の生徒が１０００人近くいるというのに、２０人前後だ。

「まあ、考えてもしょうがない。自分好みの展開にして勝とう」

彼は不良時代誰にも負けなしだった。調子に乗っている新入生に対する制裁“一年狩り”にきた2、3年を中一で叩きつぶしたという逸話すらある。テストは別として・・・

だが、この世界では全く通用しなかった。よわっちそうな奴でも能力を使って対応してくる。だから彼は努力した。全く能力が発現しなかった彼も半年してようやく発現。
１年後には能力テストで首席を取っていた。

能力テストで首席を取ってからはチート三昧。テストはスーパーコンピューター化させた脳みそで数学のテストは数分で終わり、国語や社会はネットにつないで答えを見るだけで終わり。一番ひどいのは教師のパソコンへクラックして答えをまる写し。カンニング王と呼ばれても、その名にふさわしい行いだった。

周りの連中からはむしろ重宝されて、教師にばれないように身体を変身させて答えを大々的に公開したり、Ｂｌｕｅｔｏｏｔｈで彼の目からとれた情報を携帯に送るなど、本人の言うとおり能力を無駄なく使っていたのは確かだ。

「いままでまともに使ったのがこれだからな・・・」

過去の能力使用歴を見ると9．９９９・・・・（以下略）９９割は全部成績関係だ。そのうち能力テストに使用したのは１割ほど。残りの９割はカンニングだ。と自分の心の中で自慢げに語る少年。

「戦闘に使った事なんてないからな・・・」

とりあえず原子や分子の構造を覚えておこう。
覚えておけば身体を自由にその物質に変えられる。
海聖はネットで様々な原子や分子の構造を調べ、フォルダに保存した。

「怖気ないで来たわね」

「ん？ああ・・・来て欲しそうだったから来てやった。満足か？」

「いや、まだあんたを倒していないから。満足するのは倒した後よ」

まだ開始の音すら鳴っていないのに、二人は動き出した。
そして何千人もの観客が校舎から外からと色々な方向で見ていた。
それもそのはず。この能力者育成施設で能力テスト第一位ＶＳ第二位の今世紀最大の戦いが始まっていたからだ。

「さっさと終わらせてもらうぞ」

背中に翼を生やし高速移動する海聖を風音は手も足も出なかった。

（いける！！）

そう確信した海聖は体中を鉄に変え、高速移動したまま手加減して殴りつける。

このぐらいなら大丈夫だろうと。

「・・・・手加減しているつもり？あいにく・・・・そんな手加減」

「！！」

「無用よ！！」

「うぐ！！」

目の前に広がる青白いまばゆい光。殴りつけようとした手から痺れる感覚。

そしてそこから体中に伝わる電気。

「知ってる？今更だけど鉄って電気通すのよ？」

「お前・・・・発電能力者か？」

「そう思うでしょ？だけど、これは伴奏よ？」

「どういうことだ？」

彼女の身体から今の季節とは信じがたいほどの冷気が出てくる。

「ウソだろ？」

海聖が痺れて動けないのをいいことに、風音は海聖を凍らしていく。

「く、くそっ！！」

「私が発電能力者？そんなチャッチイ能力ではないわ。それと氷結系でもないわよ？」

「くそっ！！溶けろ！！溶けろ！！」

いくら溶けろ溶けろと念じても凍っている腕が溶けるわけがない。

「そんなにとかしてほしいなら、溶かしてあげるわ」

「ま、まさか！！」

彼が予想したくなかった事。

「そのまさかよ！！」

腕から炎ではなく、別の何かを放出する風音。

その何かによって身体の半分位が凍っていた海聖は瞬時にして溶け、それ以上に鉄と身体が溶けていた。

彼女の能力を知る者はいなく、教師のみである。したがって、観客からの声は動揺と不可思議に思う声でいっぱいだった。

「何なんだ？あの能力！！」

「あら？あなたそう言えば再生能力もメタモルフォーゼの副産物であったわね。こりゃ大変。さて、次はどう弄ってあげましょうか？」

彼女の解析不能な能力によって体中を熱で溶かされた海聖は、瞬時にメタモルフォーゼで再生する。

「あいつの顔に余裕が消えた？」

観客席から見る小学生こと萌仁香は何発もの能力を投下していく彼女よりもメタモルフォーゼの能力を持つ彼の顔から余裕が消えた事の方が不思議だった。

「能力は一人に一つなはずよ？そんな手品にだまされるなんて・・・」

観客が驚くのも無理はない。

なぜなら能力には適合したものがあり一人に一つしか発現しないからだ・・・

それを連発する彼女はいったい？

#11　第一位ＶＳ第二位ー中編ー

「あらあら？顔に余裕が消えたわよ」

「・・・・」

能力者育成施設前代未聞の能力者バトル。能力者テスト第一位ＶＳ第二位。
観客数数千人。だが、先程から更に人数は増えており、一万人を超えるのも時間の問題だろう。そして誰もが勝負がつくのも時間の問題と見ていた。

「どっちが第一位？」

「あの女の人じゃない？」

「いや、今押されてる・・・ほら軽い赤のかかった髪の人」

「ああ・・・あれが、核　海聖か・・・」

「どうやらあれ“かく　かいせい”じゃなくて“さね　かざと”らしいよ」

「そんなものどうでもいいけど・・・」

「電気を使って・・・氷結系も使う。しまいには・・・炎系統か・・・

・・」

「あら？お手上げかしら？」

「いや・・・」

どんな能力を持ってるか解らない・・・・なら、こちとら本気で行くか

俺は頭の中である原子の構造を思い浮かべる。

「あら？眼なんか閉じちゃって？」

「・・・・・」

無視をするんだ。俺は徹底的に無視を決め再び身体を鉄に変える。

「この匂い・・・・だ～か～ら！！鉄は電気を通しやすいって言ったでしょ？」

彼女の腕が青白く光り手のひらから電気が海聖めがけて進む。

電気のまばゆい光は雷みたいに直進して海聖にあたり、感電する。

そう、先程はそうだった。海聖は言葉通り感電した。さらに身体が鉄となっていたため身体中に電気が流れ、痺れて動けなくなった。

今も先程と同じ鉄状態だ。だから同じように感電する。

はずだった。

「な、何！！」

風音の掌から起こった大爆発は風音だけでなく、海聖自身、いや、グランド全体を巻き込み、観客席まで爆風が届いていた。

「ふぅ～あぶねえ。身体を鉄にしなければ俺まで危なかった」

「な、何が起こったの？」

「いや、第二位の神島が電気を第一位めがけて放ったら、急に大爆発を起こして・・・」

「なにが起こったんだ？」

「もしかして、第一位の能力？」

「これで終わったか？」

海聖はゆっくりと風音の方へ歩き出した。爆発の副産物である煙と水は治まってはいなかった。

「成程ね・・・・そういうことか」

「おお、大丈夫だったか？」

「大丈夫？あんたまだ本気出していないの？」

「えっ？」

突然起き出した風音の姿は無傷だった。
あれだけの爆発を喰らったのなら服が燃えて、火傷の十か所はくだらない。

「そ、そんな・・・あれだけの爆風を喰らって無傷とは・・・」

「水素を身体から作り出し・・・電気による引火。大爆発。よく考えたわね。あんたが身体を鉄に変えたからてっきり頭が悪いかと思って・・・まやかしだったとは・・・」

「いや、爆風から逃れるためだ。しかし・・・どうやって防いだ？」

「あら？あなた私の能力まだ解らなかったのかしら？なら、本気で戦うことね！！」

「くっ！！」

狭まった距離をいいことに風音は勢いよく俺に電気を浴びせかけてくる。

「避けたわね？」

海聖たちを取り巻いていた砂煙から天高く上昇する事によって脱した海聖は戦術的撤退をした。

（なんなんだ？あの能力。様々な能力を使うだけでなくあの至近距離の爆発を防いだ）

見当もつかない。風音からの電気攻撃が来ない空でスーパーコンピューター並みの頭脳に変えた海聖は高速演算を行うが、Ｕｎｋｎｏｗｎもしくは能力の応用。

そして最後の言葉は

“能力は一人に一つ。それ以上はありえない”

「能力の応用？・・・・まてよ」

能力の応用・・・例えばさっき俺がしたみたいに電気系統の能力者も水を電気分解して、酸素と水素を反応させ爆発を起こし、相手を惑わすことぐらいできる。俺みたいなのなら、さっきしたみたいにあらゆる物質を生み出すから応用性に優れる。

（しかし・・・あいつは常に電気を体中から放っている・・・いや、電気を放っていないといられない環境だとしたら？）

そして、連発してこない冷却・放熱。しかし、常に電気を放っているのは確かだ。

「まだ、確証がない。戦って確かめるか」

そう言うと海聖は翼をはばたかせ下へ急降下する。

「うをおおおお！！」

翼を先程とは比べ物にならないほどの大きさに変え羽ばたかせる。

「す、すごい風。これが人間のする事なの？」

「あれだけのバトル繰り広げて人間語らねえだろ・・・・」

「それにしても綺麗な翼ね・・・」

「くっ！！」

風音は地面一帯を凍らせて、自分の足を固定する事によって海聖の暴風を防いでいた。

（やっぱり・・・）

俺が翼をはばたかせて生み出した暴風を喰らった瞬間、風音の体中から出ている電気が強力になった。

「もう確定だな」

「な、なにが？」

「お前の能力だよ！！」

#12　第一位VS第二位ー後編ー

5桁に近いかずの人間が見つめる中、注目の的となる二人。
一人は能力者育成施設能力テスト第一位の核　海聖。
もう一人は第二位の神島風音。

「私の能力がわかった？」

「ああ・・・・たぶん・・・・これさえすれば完全なる確証が得られる」

「？」

海聖は背中から何か煙らしきものを出している。

「そんなことして、何になるっていうの？」

「俺の能力・・・何だと思う？」

「自分の身体をあらゆる物質に変えることでしょ。そんなの今更」

そんなことわかりきっているわと勝ち誇った顔をしながら鼻で笑う風音。
だが、海聖も同じく勝ち誇ったような顔をしていた

「そう、それは正解です。ただ、足りないんだよな・・・一つ」

「足りない？」

「ああ・・・俺の能力は自分の身体をあらゆる物質に変えるだけでなくそこらの物質を別の物質に変えることもできる」

「ど、どういうこと？」

私の言っているのと何が違うの？
彼の言っている事は私には理解できない。

「ほう・・・理解できませんってか？なら見せてやるよ」

背中から噴き出す蒸気はしだいに色が濃くなっていく。
そして、先程まで晴れていた空はしだいに曇っていく。

「ま、まさか！！」

「そう・・・俺は身体を蒸気に変え、その蒸気を雲へと変えた」

「何なら自分の身体から雲を作ればいいじゃない」

「これだけの空を覆う雲を作るのにどれだけかかると思う？自分の身体が足りなくなるだろう？だから元となる物を作って、それに空気中の水分や塵を混ぜて雲を作り上げたんだ」

「そ、それが・・・な、なにになるのよ？」

「強がるなよ・・・・」

海聖は体中を再び鉄に変え、風音に近付く。
風音は手を前に振り出し、脅しをかける。

「鉄は電気を通すって言ったでしょ？感電するわよ？」
「ならすればいいじゃないか？」
風音の手が海聖のお腹に触れる。
「どうした？これなら外れないだろ？」
「う、くううう・・・」
「もしかして、電気出せないんじゃないか？」
「！！」
一瞬風音の身体がびくっと震え、額から汗が出てくる。
「図星だな。神島　風音・・・・お前の能力はエネルギー変換だろ？」
「・・・・当たりよ」
力が抜けたのか膝がカクンとなり地面に倒れる風音。
「おっと・・・」
「あなたとの戦いで力使い果たしたみたい。とりあえず今は休ませて」
「おいおい・・・あれだけ俺に攻撃を仕掛けておいて俺は攻撃なしか？そりゃ割に合わない」

そう言うと海聖は手を風音の顔に近付ける。

「ちょっと！！さすがに顔には傷つけ・・・ないで？」

「おりゃ！！」

「痛っ！！」

海聖がした事。風音にでこピン。はいこれで終了。

「・・・・・ほら行くぞ。取りあえず俺の勝ちってことで」

「もういいわよ・・・・あんた最初から手を抜いていたことわかってたし・・・」

「あれ？ばれていた？」

海聖は取りあえず審判役の教師に確認を取って判定勝ちという何ともつまらない勝ちを手に入れた。

「核　海聖か・・・・」

この頃私はよく空を見る。

あの戦いの後倒れた私は保健室へ連れて行かれた。特に異常はないと言われたが取りあえず寝ておけと。どっちなのかしらね？

で、最初に見舞いに来たのは戦った彼。核　海聖。

「よう。案外元気そうだな」

私は彼を殺すつもりで本気を出して戦ったのにこのテンションは何なのかしらね？

「おかげさまで・・・でこピンで済んだからよ」

「それは褒め言葉かな？」

「どちらでもいいわ。それより、私の能力どうやって見破ったの？」

私は誰にも言った覚えがない。教師しか知らない。
つまり、あの状況で答えを知るには推理するしかない。
ならどうやって見破ったのか？

「君はいつも体中から電気を放出しているよね？」

「ええ・・・次元上昇中は。普段は次元上昇してないからあれだけど・・・」

能力者は次元上昇オート型とＯＮ／ＯＦＦ切り替え型がいる。ほとんどの能力者は後者だが・・・

「電気に冷却・・・放熱。しまいには爆発を防いだ。けれど、その中で君がよくしていたのは電気なんだ。そこからピンときて、確証を得たのは俺が翼で出した風だ」

「風？」

「ああ。もしエネルギー変換能力なら風力発電みたいに発電するのではないかなと思って。そしたら案の定、風を受けている時身体から放出されている電気が強くなったから・・・」

「成程ね。それで雲を作って太陽を覆い私から電気を奪ったのね。でもね・・・あれでも実は発電で来たのよ。微弱だけど・・・」

「まあ、あと水素と酸素の爆発を防いだってのも・・・燃料電池的な感じでエネルギー変換をしたから無傷だった。そういうことだろう？冷却も放熱も冷蔵庫やＩＨみたいに電気エネルギーを熱エネルギーに変える。なかなか応用が聞いた能力じゃないか」

「あなたに褒められてもね・・・」

「まあ、これで俺も学習したよ。戦い方ってやつを。それについてはお礼を言っておくよ」

「お礼を言いたいのはこっちだわ。変なことにつき合わせて。むしろ謝罪かな」

「ふん・・・どっちでもいいさ。俺のプライドは守れたから・・・」

そう言うと海聖はじゃあなと言って保健室を出た。

「私はあきらめない！！」
海聖は風音を後押しする起爆剤になったということに本人は全く気付いていなかった。

「ってのがあって・・・」

「へぇ・・・・そんなことが・・」

「そっ。当時は武器の構造さえ知らなかったから身体をただの物質に変えることしかできなかったのよ。今考えると進歩したものだわ」
いまでは日本陸軍が採用している兵器の構造をほとんど理解しているからよほど大きくない限り・・・つまり、自分の身体で賄える程度の大きさなら作り上げることができる。

「で、彼を外した理由は？」

二人とも過去話に浸り過ぎて、本来の目的を忘れてしまっていた。
なぜ、前線から核　海聖を外したのか？それだけが、宮下の疑問だった。

「多次元日本救済計画に彼が含まれていないのよ」

「ど、どういう意味ですか？」

「そのまんまよ・・・彼がここにいる。いや、本人が多次元日本救済計画の一人としてきたと言っているが・・・正直私はそんなこと知らされていなかったのよ」

「じゃあ、なぜ思想犯収容所へ？」

「予知したのよ。私たちは第一次多次元日本救済計画としておくられてきたから・・・第二次もあるかと思って予知したところ・・・」

「そういうことですか・・・」

「でも、私たちよりあきらか彼の方がここにきているのが早いわ」

「そうですよね・・・・あなた方が来たのは一か月前。国境で大規模武力衝突に発展する2週間前ですから・・・・・」

海聖はその時点で一カ月と数週間前にきていたから最低でも今から2カ月前にきていたとなる。

「普通に考えたら第二次は私たちなはずなのよ・・・・なのに第一次で・・・で、計画は技術支援と、予知で、敵の行動を探り、味方を指揮しろとしか言われてないのよ・・・」

「・・・・何なんでしょうかね？」

「・・・・さあ？でも、もしかしたら・・・これから起こる別の何かに備えるために送られてきたのかもしれないわね」

「別の何か？」

「戦争ではない・・・別の何かの備えて・・・」

謎は謎を呼ぶ。これ以上考えてもしょうがないと彼らは核　海聖について語り合うのはやめたのであった。

その頃

「へ、へくち!!」

「お前・・・可愛いくしゃみするな」

「え？ああ・・・・それ綾菜にも言われた」

隣の席の横川龍介に、綾菜と同じ事を言われているのであった

#13　ソリタリーウェーブ

――――――大日本国　中部地方のどこか

ぼろぼろの建物の部屋はほとんど何もなく、殺風景に近い。ある物は冷蔵庫に電話機。
後は元々ついていたキッチンや水道、浴槽程度だ。
そんな殺風景の部屋に一人受話器を取り、話す少女がいる。

「鈴花（リンファ）・・・・核　海聖はそろそろ現れた頃だと思うが？」

バスローブを着用。そして、後ろ髪を弄りながら会話をする少女は李鈴花。
名前の通り彼女は中国人だ。

「ええ。一昨日、亡命日本人ということで来たわ。未来での資料通り、赤薙綾菜と双子設定で」

「なら引き続き監視をしろ」

「もちろんよ。チャンスが来たら回収するわ」

「ああ。くれぐれも俺達が能力者だと言う事を悟られるな。そしてできるだけ近づけ。奴の隙を見つけるために」

「ええ。解ってるわ。じゃあね、お兄様」

「ああ。じきに俺も日本に向かう」

兄妹の会話はそれで途切れた。受話器の前で唇に指を当て微笑む鈴花。

「フフフ・・・あなたの身体・・・回収させてもらうわ」

「君達、北日本から来たのよね？」

放課後、私たちは家に帰ろうとしている。

だが、突然の声に振り向く。誰だろう？まだ学校にきて3日目。名前を知る人は数少ない。

海聖は男のノリというか、なんかでクラス内でなじんでいるけど、私はあまり馴染めていない。海聖流れで男子とは仲良くなったが、女子とは周りの席の子たちだけだ。

その中で彼女はいない。

「誰？」

「あ、ごめん。名乗るのが遅れちゃったね。わたしは李鈴花（リ・リンファ）台湾から来た留学生」

「ほう、台湾か・・・」

突然話に首を突っ込んできた海聖。君達と言ったところで彼が入っていることは確かだが・・

「台湾に興味あるの？」

「ん？まあ、ＮＡＴＯ側の東アジア勢力は日本と台湾しかないからな」

「そう。私としても、日本を学ぶために来たわけだから、情報が全く入ってこない北日本について知りたくてね」

学ぶことに対する積極性。いいことだと関している海聖だが、北日本についていいことなどない。

「教えてもいいが・・・あまりいい事は無いぞ？」

「ええ。構わないわ」

「そうだな・・・中国軍によるテロ組織せん滅作戦で支障になった日本人を皆殺しとか・・・思想犯収容所だと・・・老若男女関係なく厳しい尋問。日本人はウェノムと呼ばれる虐げられる世界。簡単に言うとこんなところかな」

「・・・ひどい世界ね。よく生きていたわね」

「ん？ああ、俺らタフだから」

「そう。ありがとう。勉強になったわ。また質問するかもしれないから、その時はよろしくね」

「ああ」

そういうと、鈴花とよばれる少女は手を振って帰って行った。

「何だったのかしらね？」

「さあ？俺らが物珍しかったんじゃないのか？」

謎は謎を呼ぶ。わざわざ詮索する必要もないだろう。私たちは沈みゆく夕日を眺めて帰った。

「えっと・・・・ミカエル４・・・・右に敵車両・・・・ミカエル９前方の茂みに敵兵。対ＬＷミサイルを装備しているわ。ガブリエル２右翼から敵ＬＷ部隊確認・・・・」

耳にインカムをつけ指揮を執るのは月見里萌仁香大佐。年齢１６歳。身長１４６ｃｍ（海聖データによる）の見た目１２歳で通るような少女だ。

彼は予知能力を持つ多次元日本救済計画メンバーの一人で今は特務部隊の指揮官。

そして今は東北へ軍を進めるための第一歩として、フクシマへ軍を進めている。

「おお！！言ったとおりだぜ」

「すごいぞ、萌仁香ちゃん！！」

「楽勝楽勝」

次々聞こえてくる調子こいた発言。私の事上官だと思ってないでしょう？

「・・・あんたたち私の事上官だと一かけらも思ってないでしょう？」

「確かに・・・・大佐はロリ体型ですからね。年齢にふさわしくないというか若いというか」

「なんか言った？」

「い、いえ・・・なにも」

萌仁香の隣で言ってはいけないＮＧワードを連呼しまくった宮下は足蹴りの挙句に指揮棒で殴られている。

「痛い。いたいたいた・・・ごめん。俺が悪かったから気を取り直して」

「・・・・ったく。どうして、特務部隊の連中って上官に対する態度がなってないのかしらね」

「ホントです」

「特にあんたよ。宮下亮哉」

二人は指揮通信車内で毎度恒例の騒ぎをしている。

戦場と言う事を気にしていない。と言うよりも気にする必要がない

のだ。

ここは国境から１００ｋｍ以上離れた基地。そこから通信して指揮を執っているのだ。

普通では考えられない事である。レーダーも地形図も見ないで部隊表だけ見て彼女は指揮しているのである。

やはり予知と言う能力の賜物だ。その場にはなくても彼女には視えているのだ。まるで神の視点のように。味方がどこにいて、敵がどこにいて、そしてどのような地形をしているのかも。

「・・・・もう敵はいないわ。このまま進んでも・・・・ん？ちょっと待って」

「どうしたんだい萌仁香ちゃん？」

多次元日本救済計画メンバーによって設立された特務部隊は設立されて数週間で配備されている兵器がＬＷばかりの精鋭部隊である。普通の中隊ではＬＷが５機から１０機配備されていれば十分だ。

だが、特務部隊はＬＷが６０機配備されている。更に言わせてもらえば、この世界に本来ある筈がない、別の日本の技術によってつくられたＬＷだ。代わりに戦車などの重車両は減らされて、移動用整備車両や、歩兵戦闘車などの対歩兵用戦闘装甲車両が配備されている。

そしてＬＷミカエル隊を仕切るコールサインミカエル１との連絡中、萌仁香は神の視点を再現中だ。

「こ、これは人間？・・・・・いや、もしかして・・・・・私たちと同じ・・・何この攻撃！！」

萌仁香は通信機器のスイッチをＯＮに切り替えた。

「全隊員に告ぐわ。即刻前線から撤退しなさい」

「へ？なんで？ホワイ？」

「異論は認めないわ。命が欲しくばすぐさま撤退しなさい」

「何でいきなり・・・・何だこいつ？」

ミカエル１から送られてきた映像には萌仁香が視た映像と同じ少年が映っていた。

「みんな！！そいつからどきなさい。死ぬわよ」

「どういうこと？」

「貴様ら全員・・・逝ね！！」

特務部隊のＬＷ部隊の前に立ちはだかった少年は手を前にかざすとある言葉を言った。

「ソリタリーウェーブ・・・」

その言葉が放たれてから３秒もたたないうちに

「な、何だこの攻撃！！」

「ＬＷが・・・ゆがんでいる！！」

「・・・ソリタリーウェーブ。まさか・・・そんな・・・」

「ソリタリーウェーブ？」

隣にいる宮下は映像と萌仁香を交互に見ながら不思議な顔をしている。

「ソリタリーウェーブ・・・・日本語に訳すと孤立波。どの物質にも固有振動っていうのがあって、ある物質を自由に振動させた時に検出される振動の事よ」

「その振動がどうしたんですか？」

「破壊対象の固有振動周波数さえ特定していればソリタリーウェーブを照射する事によって共鳴現象を起こし、物質を破壊する事が出来るのよ」

「・・・えっとどういうこと？」

私がせっかく説明してあげたのに・・・こいつは！！

「全く頭の悪い奴は！！オペラ歌手がグラスの前で高音あげて、グラスを割るっていうの見たことない？」

「なんか見たことあるような・・・」

「それよ。あれはグラス限定じゃなく、他の物質でも同じ事が出来

るのよ。それをあいつはやってのけたのよ」

前にいた日本でもまだ実験レベルで正規軍に配備できるような兵器ではなかったのに・・・

それを生身の人間が？

「ぐううう！！機体損傷が激しい。一時退却します」

「そう簡単に逃がすと思ったか？出力上昇・・・」

「機体ダメージ８０％・・・・限界です。脱出します」

次々と指揮通信車から聞こえてくる叫び声と悲鳴。更にそれに続く爆発音。

モニターからはノイズが入っていたと思ったら、画面がくしゃくしゃになった。

「こちらミカエル１。非常脱出装置で何とか脱出しましたが・・・・脱出できたのは僅かです」

「・・・・・ＳＴＯにも能力者が・・・・それとも振動兵器でも開発したとでも？」

謎は謎を呼ぶ。第二次極東戦争へと発展した武力衝突においてのＮＡＴＯ軍の勢いは失われつつあった。たった一人の少年によって。

#14　あたりまえな日常

「こちら北陸方面軍・・・謎の攻撃により、車両が大破。ＬＷですら手が負えません」

ぼろぼろになった姿のまま無線機で必死に連絡をする兵士。彼の背後では盛大な爆発音と、なにかの催しでもあるのかと疑わせるぐらいに光り輝く光景があった。

「ウェノム達よ・・・・貴様らが過去にしてきた事を悔むがいい」

「な、何言ってんだこいつ・・・・ぜ、全員撃てええ！！」

次々と宙をとびかう鉄の塊はたった一人の少年めがけて進んでいた。

その弾の中には対戦車ミサイルや対ＬＷミサイルも含まれている。既に兵士たちは彼が人間ではないという事を身体で認識しているのだ。

ミサイルなど人に向けて撃つ物ではない。

「や、やったか？」

盛大に繰り広げられた十字砲火は周りを煙で見えなくさせていた。ただそれだけ。

「ふ、ふふふ、ふはははは！！何だ？その生ぬるい攻撃は？」

「い、生きているだと？そんな・・・・」

「死して償うがいい。マイクロウェーブ」
砂煙が舞う中ふらりと影を現した少年は手を開いて前にかざす。それだけだった。
それだけなのに・・・

「何でこんなことになっているのかしらね？」
ＮＡＴＯ日本司令部の地下深くに作られた、国家機密レベルである“多次元日本救済計画”のメンバーたちが集う部屋の特等席に座るのは小学生。
「小学生じゃないわよ！！」
「ま、まだ何も言ってません・・・」
「フンっ！！」
「はい？」
部屋に入ってきてそうそう怒鳴られた特務部隊の取りあえず隊長宮下亮哉。
「・・・この間の謎の事件ですね。でも、みんな覚えていましたよ？」

そう、普通能力を発動させたなら次元上昇を見ていない兵士は覚えているはずがないのだ。それを、兵士たちは全員覚えていると。

「そこなのよね。だから腕でも改造された人間じゃないかって。この間のミカエル事件と同一人物っぽいし。しかも使っている能力が違うのよね」

「違うって？」

「私たちが映像で見ていた攻撃はソリタリーウェーブ。固有振動と同じ振動を浴びせることによって共鳴現象を起こし物質を破壊する。でもこっちを見なさい」

そういう萌仁香は画面を切り替え、ついさっきまで見ていた映像に切り替える。

「ＬＷや、戦闘車両の破壊のされ方を見なさい」

宮下は言われた通り目を見開いて破壊されるまでの一部始終を見た。

「・・・・なんか、溶けている感じですかね？」

「ご名答よ。この北陸方面軍が味わった攻撃は多分マイクロウェーブだと思うわ」

「マイクロウェーブ？」

・・・・そんな事も知らんのか！！あんた本当に士官学校出てるの？

「はぁ・・・・電子レンジって解る？」

「ば、馬鹿にしてるんですか？」

「ええ。勿論。そのつもりで言ったんだけど気付かなかった？」

「・・・・電子レンジぐらい知ってますよ」

「そんな落ち込むなって。誰の所為か知らないけど」

「あなたですよ！！で、電子レンジがどうかしたんですか？」

おっと・・・忘れてたわ。

「電子レンジってどうやってものを温めてるか知ってる？」

「なんか電磁波がどうとか・・・熱い光線でもかけてるんですかね？」

「まあ、おしいって言えばおしいわね。誘電加熱って言うのが元の発想で、誘電加熱って言うのは高周波をある物体に浴びせることによって誘電体内部に持つ電子やイオンが・・・」

「・・・・・」

「だ、大丈夫？」

説明しているさなか萌仁香が気付いたのは宮下が首をかしげている事だった。

「ええ、なんとか・・・」

「私の言っている意味理解できている」

「全然」

「だろうね・・・・簡単に言うわ。多分これなら中学生でもわかる。寒い順に並べると物質は固体、液体、気体にわかれる。寒いと物質の分子運動がしなくなり物質は冷たくなる。分子運動が無くなり固まっている状態を固体。ある程度暖かくなり分子が動きやすくなっている状態を液体。そして熱くなると分子の動きは活発化する。それが気体。それぐらいは解るわよね」

「大丈夫です。ついていますよ」

「あらそう。で、電子レンジってのは周波数にもよるけど、その分子運動を活発化させる周波数を浴びせることによって暖めるのよ」

「成程。以上萌仁香ちゃんのよくわかる解説でした」

「誰に話してんのよ」

こいつ・・・やっぱ頭おかしわね。

「ひ、独り言です」

「で、さっきの謎の少年の話だけど、電子レンジよりも数千倍激しい事をしている感じ」

「つまり・・・・」

「ええ。本来電子レンジは水分系の物を温めるために出来ているけど、固体・・・しかも製鋼所で作られた特殊な装甲ですら溶かす・・・・能力であろうと兵器であろうと危険極まりないのは確かだわ」

「どうします？今からでも海聖君を最前線に持ってくるのは遅くないと思いますけど」

「まだ判断するのは早いわ。なぜ、彼が送られてきたのか・・・検討する必要がありそうだから」

「なあ、綾菜」

「ん？何かな。藪から棒に」

「棒で悪かったな」

「ことわざよ。私北日本にいたから使ったことないし。ちょっと使ってみたかったのよ。で、何の話？」

今・・・俺がいる場所を言おう。多分見当はついていると思うが綾菜の家だ。かつてはＳＴＯ共同統治地域。今は日本という傀儡だろうが日本人が政治をしている国の物だ。

「俺って・・・・ここに送られてきたのって日本を救うためって知ってるよな」

「うん。前に聞いた」

「俺何してるんだろうか？」

「・・・・今更？」

少し驚いた様子で俺を見る綾菜。

「どうした？」

「いや、別に・・・」

もう季節は冬。海聖が学校に通い始めて3カ月。クリスマスまであと1週間程度だ。

「で、最近思うんだ。俺ここに来る意味なかったんじゃないだろうかって」

「そんなことない！！」

いきなり机をたたいて立ち上がったのは綾菜だ。

「あ、ごめん」

「いや、気にしていないが・・」

「だって海聖来てくれなきゃ私死んでたよ？ほかにも助かった日本人だってたくさんいる。世界か見れば百人ぐらい些細なことなのだろうけど、それでも日本人って日本の一部なんだからそれを救ったのなら日本を救ったことにならないの？」

「う～む・・・人の見方次第だろうな」

「それに・・・とりあえず、私のボディーガードだけは欠かさないでね」

「肝に銘じておこう」

他愛ない話。こんな話でも北日本では考えられなかった。
今では当たり前の日常。でも、この当り前な日常が綾菜にとってどれだけ大切かは海聖は知る由がない。

戦争

――――――それは国と国とが争う国際法上認められた人殺し。人間や兵器と言う駒を使った戦略ゲームだ。

そしてその戦争と言う名のゲームがいつどこで起きるか解らないほど世界が二極化し互いにいがみ合い対立しているこの世界ではそんなあたりまえな日常が平和に感じるのだった。

#15　破壊者

「なんだこの住所は？」

突然海聖命名“小学生”こと萌仁香と宮下に呼ばれた海聖はどこか解らない住所が書かれた紙を渡された。

「避難所よ」

「ひ、避難所？」

「ええ」

俺は理解できなかった。いや、そこに避難所があると言うことは解った。

だが、その住所の書かれた紙をなぜ俺に渡す？

「なんでそんなものよこすんだって顔してるわね」

「あたりまえだ。何を今更・・・」

「今更？あんた今この国がどんな状況におかれているか解ってるの？」

「・・・・」

考えて3秒。そして沈黙の3秒。思考停止するまでの3秒。

「解らん」

きっぱりと答える海聖。呆れて言葉が出ない萌仁香と宮下。

「・・・・テレビ見てるの？」

「いや・・・俺の情報ではテレビは視力を悪くすると聞いたのでな」

「あんたの能力にそれは関係ないでしょ・・・宮下説明してやりなさい」

バトンタッチ。めんどくさいからよろしく。

「お、俺ですか？」

「あんた以外誰がするのよ」

「はいはい・・・そうですね。えーと、3か月前の国境における武力衝突は第二次極東戦争へと発展。3カ月間の戦闘で・・・」

続きを言おうとした宮下は海聖の言葉で遮られた。

「小学生のおかげで連戦連勝っと。間違いねえな？」

「小学生言うな！！」

「まぁ、こいつは放っておいて・・・続きを言ってもらおうか」

海聖は能力で右手を長くしているため、その状態で頭を押さえられているせいか萌仁香は殴ろうとしても蹴ろうとしても全く届かない。なんとも微笑ましい光景だ。

「えーと、ＮＡＴＯコードネーム“デストロイア”が現れた瞬間、ＮＡＴＯの進撃も衰え、今や逆に押し返されつつあります」

「で、デストロイア？」

デストロイア・・・破壊者。どういうことだ？

「今破壊者とか思ったでしょ。そのまんまよ。手を前にかざしただけであらゆる兵器を破壊つくす。姿形は人間」

「能力者か？」

海聖にとってそれ以外思いつくはずがなかった。体中機械に変えられたところで今の技術では戦闘用アクトロイドもどきになれるかどうかだ。だが、戦闘用アクトロイドとは言え、たった一体や二体ごときで戦場の最前線における戦術・戦略を塗り替えるか？何度も言ったようにそれは不可能だ。所詮人間とＬＷの中間的な存在。戦車や装甲車を倒すにはそれなりの重武装をしないといけなくなる

地上兵器最強の座を狙うＬＷに敵うには地上以外、空や海から攻撃するならば、超高高度爆撃や海上からのミサイル攻撃、艦砲射撃程度だ。今時対空用の小型化された極超音速ミサイルの１０発や２０発。大型のＬＷになれば５０発程度は搭載している。

今の技術力ではその速度を超える戦闘機など無人機以外あり得ない。有人機の場合チャフをばらまいたところで逃げることなどほぼ不可能だ。

したがって近距離でＬＷと戦うにはステルス機能を備えたいわゆる

第５世代戦闘機。開発成功しているのは米国主導開発のＦ－２２、Ｆ－３５。日本単独開発の心神、ソ連製のＴ－５０、中国製のＪ－２０程度だ。

もしくは、多次元日本救済計画で提供されたＡＣＭ搭載戦闘機程度。

つまり、この世界でまともにＬＷと真正面から戦えるのは戦車５台。もしくは能力者。しかもとびっきりの戦闘特化型能力。

「そうね。そう考えるのが妥当なのよ」

まるで分かっていましたよと言わんばかりの返答。

「何が言いたい？」

「いや、普通次元上昇を見られてなければ周りの人間は解らない。それが普通なのよ」

「次元上昇時の忘却現象か・・・」

「そう。それがなかったのよ・・・・」

「・・・・俺の耳がおかしいのかそれともお前の頭がおかしいのか？どっちだ」

「後者は確実に間違っているわ。前者はもしかしたらあっているのかもしれないけどあいにく両方ハズレ。だからあんたに聞いてみたのよ」

まあ、俺みたいな戦闘特化型能力者から案を聞くのはいいことだな。

「成程ね。で、どんな攻撃パターンだ？」

「私が見たところ・・・・固有振動を特定してそれと同じ振動を浴びせかけ物質を破壊するソリタリーウェーブと電磁レンジみたいに物体にマイクロウェーブをかけて蒸発させる。この２パターン。前者は理論上破壊できない物質は無いからともかく、後者は私たちが持ってきた技術によって作られた特殊装甲さえも溶かす。相当な戦闘特化型よ」

「・・・・成程。そりゃあ、たがいに相性悪いな。向こうはその攻撃を仕掛けても俺は何度も再生する。けれど俺は攻撃する余裕がない。向こうも常に攻撃していないといけない。どちらかが力尽きるまで・・・・」

「まあ、そういうことでちょいと日本押されぎみだから」

「そうか・・・」

そう言うと海聖は下をうつむいた。

「ああ、大丈夫、大丈夫。これぐらいでくたばる萌仁香ちゃんじゃないから。海聖はまだ普通に学校に通ってて。綾菜に何かあると大変だから。いつ、ここまで進行してくるかわからないからで、そのための時用の避難所ってこと。ステルス機能も完備しているし、そこらの核シェルター以上の防御力を誇るから」

成程。そういうことだったのか

「なら話が早いな。ちょっと待ってろよ・・・」

海聖は眼を突然変なレンズに変え、そこから出た可視光線を紙にあてる。

「な、何やってんの？」

「ＳＣＡＮ・・・１００％Ｃｏｍｐｌｅｔｅ　Ｅｎｄ」

そう言い終わると海聖は眼を更に近未来化させ、萌仁香から渡された紙をレーザーで燃やす。

「な、何してんの」

「機密情報だ。燃やしている。安心しろ。情報はすべて俺のここにある」

人差指で自分の頭をつんつんと叩くところがなんとも腹立たしい。

「・・・まったく。ホント無駄なく能力使うわね」

「そりゃ言い褒め言葉として受け取らせてもらう」

「どっちでもいいわ。それと綾菜によろしく言っておいて」

「了解した」

海聖はそう言うとその場所から離れた。

「私たちがそれを渡すってどれだけ危険な状況か解ってるのかしら？」

「さあ？」

「デストロイアと同時に密入国した人間が一人あんたの学校にいる可能性があるのに・・・」

何もなかったかのように歩き去る海聖を見守る二人であった。

#16　東京陥落

4月6日
高校二年生になろうとしていた海聖と綾菜。彼らはまだ知らなかった。

――――――トウキョウ陥落
その一報が日本中を駆け巡った。北日本ではトウキョウ再奪還となっている。

突如として現れたＮＡＴＯコードネーム“デストロイア”はＮＡＴＯとＳＴＯとの戦場にＳＴＯ側の味方として現れ、連敗続きだったＳＴＯの流れを一挙に勝ちへと変えた。

「まずいわね・・・・」

ここは東海方面軍司令部。多次元日本救済計画本部は新たに近場へと緊急に移された。

敵の大侵攻と破壊者（デストロイア）の出現を予知した萌仁香によってＮＡＴＯ軍は東京を捨て大撤退をし被害ゼロで済んだ。もし戦っていたとなれば東京周辺を防衛していた関東方面軍は全滅していただろう。

「・・・予想外の事態ですね。どうしますか？」

「なにがよ？」

宮下の質問にイライラを隠せずにこたえる萌仁香。

「海聖君の事です」

「・・・・使うかもしれないわね。最後は・・・」

「そうですか・・・」

「あくまで最終手段と言うことだけど・・・」

最終手段・・・追いつめられた時の最後のあがきで使う手。
どのような事態になった時にその最終手段を使うかとは、聞けない宮下だった。

「鈴花・・・残念だったな」

「すいません・・・お兄様」

殺風景の部屋で語り合う二人。一人は李鈴花。もう一人は彼女の兄。

「確かに・・・神とまで呼ばれ、崇拝されるまでになった男をそう簡単に捕まえようとしたこと自体が間違いだった。ならば・・・俺の手で消し去ってやる」

「ま、待ってくださいお兄様！！」

電話越しで慌てふためく鈴花。

「なんだ？」

「わ、私にもう一度チャンスを！！次こそは、確実に・・・・」

「・・・・次は無い。もう我々は星霜学園を強襲する事が決定した。もし、クラスメイト達を犠牲にしたくなければその前に核海聖を確保する事だな」

「・・・・・」

鈴花は何一言も言えなかった。でも、解った事だけなら少しある。

私にはまだチャンスがある。

「・・・・海聖」

「ん？」

パジャマ姿で俺を上から睨みつけるのはこの家の主人赤薙綾菜。

「これ・・・どういうことよ！！」

机の上にたたき落とされた新聞を見る。

「なになに・・・・トウキョウ陥落？４月１日は５日前だぞ？」

４月１日。通称エイプリルフール。日本語訳４月バカ。

「嘘じゃないわよ！！」

「ん？」

寝起きの顔で新聞を凝視する海聖。朝刊の隣に書かれた日付には４月６日付けと記されている。

「どういうことだ？」

「私が聞きたいくらいよ！！」

「俺に言われてもな・・・俺が任されているのは現在進行形綾菜の護衛だけだからな。連絡も小学生からあまり来ないし・・・」

“避難所”の一件以外、なにも連絡が来ない。

愛想を尽かされたのだろうか？

「へ、へっくしょん！！」

「以外と大雑把なくしゃみするんですね」

またこいつか・・・

心の中でそう思ってしまったのは月見里萌仁香。多次元日本救済計画の実質的なリーダーで、特務部隊の指揮官。隊長は宮下亮哉。

またこいつか・・・のこいつは言うまでもなく特務部隊隊長宮下亮哉。

くしゃみに大雑把も繊細もくそもないでしょ！！

「悪い！？」

「い、いや・・・べつに・・」

「今日は一段と機嫌が悪いのよ！！話しかけないで」

萌仁香の今日の機嫌はいつにもまして悪いようだ。

それもそのはず・・・

「ち、因みに聞きますけど、こ、この書類は・・・？」

宮下亮哉は触れてはいけない、いや、踏んではいけない地雷を踏んだようだ。

「始・末・書・に・決まってんでしょうが！！！！！！！」

東海方面軍司令部地下“多次元日本救済計画臨時本部”では萌仁香の怒号が、司令部全体に伝わるほどの音量で響いていた。

#17　歴史論争

「それは違うな。南京虐殺はあったとは思うが数十万人も殺せると思うか？当時南京にいた海外の記者はあったという記者となかったという記者がいた。だが、なかったと言った記者が大半だ。場所によっては便衣兵と間違えて殺された民間人も少なくないだろう。多分それを見間違えたのだろう。当時南京にいた帰還兵たちの９割はそんな事はなかったと言い張っているからな」

「では残りの一割は？」

「捕虜の尋問だけは悲惨だったそうだからな。尋問しすぎて殺したのだろう。そこまですれば虐殺だろうから、条約違反していたのは確かだな」

「成程ね。私の知る中では中国では五十万人が殺されたと書かれているそうよ。当時は二十万人しか人口がいなかったそうだから・・・」

放課後の図書室。特に誰もいない空間で核海聖と李鈴花は互いに歴史論争を繰り広げている。

こうなったのも僅か１時間前。

――――――教室

ＳＨＲ・・・いわゆる帰りの会みたいなものだ。それが終わって今日もお疲れさまでした。みたいな時に俺は綾菜に言われた。

「ごめん海聖！！今日は一緒に帰れない」

新が付き添うそう言われた言葉がこれ。

理由は色々あったが友達と何処かへ行くのだろう。こんなこと言われたのは初めてだから、たぶん、綾菜にとって初めての事に違いない。

北日本では中国人や朝鮮人。ロシア人の入植もあり、さらには徹底的な思想教育、管理社会が通っており、友達など作れなかっただろう。

「まあ理由はどうでもいい。友達待たせるのは悪いからさっさと行って来い」

「ほんとごめんね」

最後まで謝って友達の方へ走って行った。

さて・・・俺は暇人となったわけだ。そんな時に声をかけてきたのが台湾からの留学生と言う李鈴花だ。

「今暇？」

「暇してるが？」

「なら、ちょっともう一回聴いておきたいことあるんだけど・・・いい？」

「なんだ？」

「ちょっと図書室まで・・・」

そして一緒に来た図書室で繰り広げられた歴史の相違。
そこから発展した歴史の論争。

「さすがに五十万は嘘だと思うけど・・・」

２０１０年の中国の教科書では三十万人だったのが年々増えて行き、いまでは五十万まで南京虐殺された被害者が増えている。約２倍だ。２倍。

「更に言わせてもらえば日本軍の進行を遅らせるために台湾政府・・・元国民党は黄河を決壊させたそうじゃないか？」

「それは私たちの歴史でも書かれていたわ。ただ、中国の方ではそれも日本軍の仕業になっているわ」

何でもかんでも日本の所為だな。

「成程ね。日本を悪くたたき貧困層のストレスを日本叩きする事によって発散させるのか・・・もしくは北日本の統治をしやすく・・・だから、日本人がウェノムと呼ばれ罵倒されるんだろうな」

「そうね・・・北日本の惨状を私は知らないから。でもあの子の傷・・・」

「あの子？」

「綾菜の事よ。薄れてきているけど顔の傷や・・・腕の傷。更衣室で着替えている時に背中にあった傷・・・」

よくそこまで観察しているな。

「解っていたのか・・・ああ。日本軍が来なければあいつ死んでいただろうな・・・」

何処か遠い目をする核海聖。

（何処かに隙が来ないか・・・・）

こんな時でも海聖の隙を探る鈴花。ようやく二人きりになれたのだ。回収するにはちょうどいい。

「でもさ」

「！！」

不意に声をかけられた鈴花は身体をびくっとふるわせた。

「何で震えてるんだ？武者震い？」

「んなわけないでしょ。で？」

「そうやって近くでも綾菜のこと心配してくれている人が、目にかけてくれる人がいるだけでも俺は嬉しいよ。台湾人と言っても中国人。遭いなれないと思ってたけど、君本当は根がいい人でよかった」

「べ、別にそんな・・・・」

ただ回収するためにあなたに近付いた・・・・なんてこんな笑顔の前で言えるわけがなかった。いや、たとえどんな顔でいても、どんなに口が裂けても言えるはずはないが・・・

「それと気になっていたんだけどいい？」

「な、なによ」

「良く歴史について調べているけど将来何になりたいの？」

「・・・・特に決めてないわ。私の事よりもあなたは？」

「・・・この日本を変えたいんだ」

「日本を変える？」

馬鹿じゃないの？あなたは・・・あなたの所為で・・・世界は・・・

「聞いてる？」

「えっ、き、聞いてるわよ」

「良かった。この日本を統一したいんだ。でも中国人や朝鮮人、ロシア人を追い出すのではなくて・・・・君と話して解ったんだ。誰でも知らない人間だと、人種だけで嫌ったりするけど・・・話してみるとやっぱり同じ人間だなって」

「私みたいのならね」

彼女はこれでもちゃんとした歴史を知っている。自分達が不利になるような歴史も改ざんせずに歴史として学んでいる。

「でも、他の人たちはそう考えないと思うわ」

いい代表例が中国人、朝鮮人だ。ごく一部では違う人もいるが・・・

「いくらわかりあおうとしても、自分達の考えが一番だと思うから。いくら日本人が中国人とわかりあおうと思っても北日本での惨状を見たら、誰構わず中国人嫌いになるわ。同じように中国人が日本人とわかりあおうと思っても過去の歴史を教えられて、結局好きになれない」

「それぐらいは解っている。でも、その繰り返しが人類の築きあげてきた歴史なんだ」

侵略して、殺して、奪って・・・・この繰り返し。歴史と言うのは戦争なしでは語れない。
戦争という概念がなければ今のような技術は無いだろうし、なにより人間に欲という物がなかっただろう。

「もっと言わせれば、日本をはじめに侵攻して、日本人を殺したのは中国や朝鮮の人たちだ」

弥生人の日本列島の侵略。結果的には縄文人と和睦して仲良くなったが・・・
それから数千年後の鎌倉時代では有名なのが元寇。正確的にいうとモンゴル帝国だが、侵略してきた兵士の大半は中国人と朝鮮人だろう。

「でも、そんな事日本人の誰が騒ぐ？昔の事だからで済むんだ。でも、彼らはまだ、記憶に新しい歴史だからいまだに文句を言い続ける。俺達から見たらその歴史を味わった人間は一人もいないのだからもう既に過去の事なのに。でも、それですませられない人もいる。だから、そういう意味で統一したいんだ」

「そう・・・・」

でも無理よ。人間は相容れないもの。仲良くなんて所詮上辺だけだわ。

仲良くなれないから戦争をする。あなただって戦争のために送られてきたようなものでしょ？

「まあ、遠い先の話だけどね。さて、時間も遅いしそろそろ帰りますか」

「そうね・・・・帰りましょう」

でも、彼の言いたい事だけはわかる気がする。私たちも平和を望んで・・・

私たちの歴史を変えたいからここにいるんだから・・・

平和にしたい。それは世界のほとんどの人間が望む事よ。

だけど・・・・

「こ、こちら北陸方面軍第2師団・・・・謎の攻撃により味方部隊壊滅。至急応援を！！」

北陸の最北端新潟。福島での戦闘を大勝利に収め、続く東京奪還作戦ではＮＡＴＯが敵前逃亡で被害ゼロの東京奪還作戦は成功しＳＴＯ軍は戦力を一か所へ集中。長野を奪い、何処から漏れた情報か解らないが、多次元日本救済計画本部がある東海方面軍司令部を東と北から攻め落とす魂胆だ。

「ひっ！！」

無線機で応援を呼んでいた兵士は突然後ろから頭を握られる。びっくりして後ろを振り向くと彼らの恐怖の対象・・・多次元日本救済計画メンバーＣＯＤＥ　ＮＡＭＥ“デストロイア”

そんな名前とは別に顔はまだ幼さが残る少年だ。

「貴様らがこの戦争で勝つことは、世界を滅ぼす第一歩だとなぜわからない？」

「は、離せ！！」

「五月蠅いウェノムは消え去れ！！」

「ぎゃあああああああ！！」

身体が燃えるように熱く、ゆがむような、身体が振動している。
謎の痛さを経験した兵士は何をされたのかすらわからずに散って逝った。

「・・・・安らかに眠れ」

そう告げると彼は何もなかったかの如く燃え広がる戦場の跡地を歩いて行った。

「平和なんて・・・・人間が生き続ける限り・・・・欲望を望む限りこないものよ・・・・」

#18　海聖の消失

――――――進級してから1週間後の４月１４日

「海聖っ！！」

「悪い！！」

「まだ何も言ってないじゃない」

どうせ、この時の返答ぐらいわかってる。“一緒に帰ろう”だろ？

「わかるんだよ。お前とどれだけいると思ってる？それに、この時間帯に言うセリフなんてそれぐらいしかないだろ？」

ＳＨＲ終了。つまり放課後だ。部活も委員会も入っていない俺達にとって帰る位の選択肢しかないのだ。成績底上げのために体育で筋力増強したり、あらゆるスポーツ選手の動きを見て、それに見合う動きになるように脚部を機械に変えたりしていろんな部活から来ないかと誘われたがすべて断った。

何故か？それは・・・

「少し待ってろ。用事があるからそれが終わったら、帰ろう」

こいつが、エンジェル対策本部に狙われるかもしれないからだ。もしかしたら、エンジェル対策本部メンバーがこの学校内にいるという話も聞いている。

「うん」
俺のご主人さまを傷つけるわけにもいかんからな。
俺はそう考えて屋上へと上る。
「よう。こんな時に何の話だ？鈴花」
「悪いね海聖。こんな時間に呼び出して」
海聖。最初のころは君だったが、今では呼び捨てだ。
クラスの中でも綾菜に次ぐ仲のいい女子だからだ。
「いや。それほど気にしてはいないが」
屋上にいたのは李鈴花。机の中に入っていた一枚の書き置き。
“屋上で待ってる。　Ｂｙ鈴花”
何の用事かもわからない。約束した覚えがないのだ。
だが、なにかあるのは確かだ。
「そう。ならいい。ちょっとこっち着て」
俺は言われるままに柵の方へと歩いていく。
「ここから見える景色。すごいわね」
「ああ」
第二次極東戦争は現在進行系ＳＴＯの優勢だ。第一次後よりは国境

が前進しているが、それも時間の問題。国境が前よりも後退する可能性の方が高い。

「軍隊の駐留する町に戻ったわ」

糸魚川構造線付近のこの町はかつて・・・といっても半年とちょっと前の話だが、軍隊が師団規模に駐留する町で、町は軍隊様様。軍人がばらまくお金でこの町は活気づいていたのだ。その活気が再び戻ろうとしているということだ。いいことなのか悪い事なのか・・・

「ああ」

町内の高い建物には対空レーダーに対空ミサイル。山の山頂にも対空レーダーやＡＣＭ。自走電磁投射砲までもが配備され、所々にビルに偽装した建造物にＬＷがしまわれている。どんな時でも緊急展開できるようにだ。

「でも、それも終わるから安心して」

「どういうこと？」

海聖には理解できなかった。

「・・・ごめんね」

「うっ！！」

「すぐに終わるから・・・痛くしないから・・・だから、お休み」

不意に首に刺された注射器のような物体。海聖は何が起こったのか

理解できずに、メタモルフォーゼをする間もなく眠った。

「こちら鈴花です・・・・神の捕獲・・・成功しました」

「・・・良くやった鈴花」

「いまからそちらへ行きます」

その日・・・海聖を見た人物は誰一人としていなかった。

――――――綾菜宅

「海聖!!約束破ったわね!!」

自分の家に帰って早々と怒鳴り散らす綾菜。それは完全に同居人たる海聖に向けられた言葉だった。綾菜自身海聖から何かの応答ぐらいはあると思っていた。

「・・・・・」

返答なし。

「海聖!!怒ってないから出ておいで!!」

子供じゃねえ。とか言う反応が来ると思っていた。

でも、反応どころか、家中探しまくった末に海聖は見つからなかった。

「どういうことなのかしら?」

その日、綾菜は海聖を一度もみなかった。

「えっ？来てない？」

「ええ。残念だけど・・・しかも私海聖呼んだ覚えないわ」

ただいま綾菜は海聖ＣＯＤＥ　ＮＡＭＥ“小・学・生”とお電話中であります。

勿論内容は海聖の件だ。

「と言うことは海聖の用事はそっち関連じゃなかった・・・・」

「どういうこと？」

「あのね・・・放課後一緒に帰ろうと思って。でも用事があるから待っててくれって言われて待ってたんだけど、７時になっても来ないから帰って」

「家に戻ってるかと思っても家にいないと・・・」

「そうなのよ」

「・・・・でも、あいつが殺されることは核兵器が落ちない限りまずあり得ないから・・」

「それとも彼女とかできちゃったのかな・・・・結構人気だし・・・・」

「ぶっ！！・・・あ、あいつが人気だと！！」

電話越しで紅茶を飲んでいた萌仁香は突然言われた衝撃の事実に噴き出してしまった。

「げほっ・・・んんんん・・・」

「落ち着いた？」

「ええ。天地がひっくりかえるようなこと言われたから・・・」

萌仁香が知る限り女子（特に成績優秀者）からはかなり毛嫌いされていた。

その理由の一つとしてはカンニング王というのが有力候補だ。

元々こいつは勉強しなくても、教科書をスーパーコンピューター化させた脳みそでスキャンし、脳みその中に保存するというある意味カンニングな行為をしてテストは常に満点。英語なんか、翻訳サイトとつないで英文を翻訳するとか、日本語文を英文にする。リスニングでは聞こえた音声を０．００００００（以下略）位の速度で処理し、英文に書き換え翻訳する。

勿論ほとんどの人間が努力し、カンニングする連中もカンニングするための努力をしている。例えとしてはカンニングペーパーを作るなど。だが、ここまで努力のしないカンニングは無いだろう。

そういうところで嫌がられたとか、運動神経がいくら良くても海聖

は命令通りに動く機械の身体に変えることなど０．００００（以下略）位の速度で作れるため、海聖に敵う者などいなかった。プロの陸上選手の走るフォーム通りに動く身体に変えてから異常に筋力増強して５０ｍ走を４秒台で走ったなど、世界記録を塗り替えることなど楽勝（ギネスには載っていないが）だった。

そしてなにより女子に興味など持つ奴ではなかった。一番。勝ち。そういう言葉にしか興味を示さない。ある意味性質の悪い奴だ。別に根っこが悪い奴と言う意味ではないのだが

「だって運動はできるわ、勉強はできるわ。いろんな部活からの引っ張り合い。本人は勘弁してくれと嘆いていたけど・・・」

「それ、全部・・・」

勿論萌仁香には予測ができていた。

「ええ。メタモルフォーゼによる賜物よ。事情が知らないっていいわね。まあ、あれで顔は悪くないし背も高いからってのが後押ししてるんだろうけど・・・正直言って双子なんて設定にしたからすごい劣等感を感じてるわ」

「お気の毒に・・・」

「まあいいわ。海聖そっちにもし来ていたら連絡してね」

「わかったわ。じゃあね綾菜」

「じゃあね。たまにはうちに遊びに来なよ」

「少し用事があいたらね」

そう言うと萌仁香は携帯の電源を切った。

「核海聖がいない。どういう事？」

誰にもその謎は解けなかった。

#19　海聖捕獲

「お兄様・・・これでいいかしら？」

「ああ。よくやった。これで俺達の未来は変わるだろう」

殺風景の部屋で話す二人の横に縛られて転がっているのは核海聖。
この日本を救うため別次元の日本から送られてきた超能力者。
そして・・・

「あの独立交易水上都市の神様にこんなことしていいか知らないけど・・・」

「かまわんさ。俺達の世界が変われば神様ではない。それだけだ」

二人の顔はそれなりに満足げな顔をしていた。だが、それでも鈴花の顔だけは何処か浮かない顔をしていたのは間違いなかった。

（たしかに・・・私たちの世界。未来のため。でも、きっとこの人は世界を変える大切な人。いいのか・・・）

そんな事を考えている鈴花の隣では携帯を手に誰かと会話をしている鈴花のお兄様こと李震煉（リシェンリャン）

「そろそろか・・・」

「なにがです？」

「な～に・・・そろそろ攻撃が開始されるから」

「どこにですか？」

震煉からの返答はさほど時間がかからなかった。でも、鈴花にとっての体感時間はかなりの長さに感じられた。

息をのむ。わずか数秒。

「星霜学園に」

震煉はためらわずに、何もないように答えた。

「！！」

その刹那――――――

鈴花は戦慄を感じた。

親しくしてくれた人たちに、恩をあだで返すようなことはしたくない。

だから、今までためらっていた海聖の捕獲を緊急決行してそれを防いだ。

海聖を捕獲できなかったら学校の生徒達を餌にして呼び寄せるつもりだったのだ。

でも海聖は捕獲した。だから星霜学園強襲などあり得ない。そう思っていたのに・・

「なぜです！？」

「こいつは人間から神になった男だ。ちょっとやそっとで言う事を聞くと思っていたのか？」

「そ、それは・・・」

「それともこいつと親しくなったから言うことでも聞いてくれるとでも思ったか？」

「・・・・学校の生徒たちは関係ありません」

「関係なくともこいつを脅しかけるには十分だ」

「・・・」

何も言い返す事が出来ない。どちらかとるかを悩んだ末に人的被害の少ない海聖の捕獲を選んだのに・・・結局海聖を苦しめ、綾菜を、そしてクラスのみんなを・・・学校のみんなを苦しめることになった。

「そこでそいつを監視していろ。俺は星霜学園に向かう。赤薙綾菜とか言ったな？そいつを人質にすれば・・・くっくっく」

不気味な高笑いをして震煉は外に出て行った。

「ごめん・・・・みんな・・・」

兄には逆らえない。能力で戦っても勝てない。でも、それでも、みんなを守りたかった。

初めは日本人なんてみんな死んでしまえなんて思っていたけど・・・

日本の歴史に書かれている事なんて嘘だと思った。実際みんな明るくて、素直で、歴史についてはよくよく調べると自分達の知る歴史の方が嘘が多かったのだが・・・

「どうすればいいの・・・海聖・・・」

傍に縛られて横たわる海聖に抱きついて鈴花は一人泣いていた。

#20　海聖VS鈴花ー前編ー

「ここは・・・」

「気がついたかしら？」

重い瞼を開け、うす暗い部屋の明かりですら少しまぶしく感じていた。

僅かな視界の端に写る少女の名は

「鈴花か・・・いてて」

「無理はしない方がいい。軽い神経毒とスタンガンで眠らされていただけだけど・・・それなりに後遺症が数時間残るから・・」

「そっか・・・どおりでさっきビリっと・・・・どういうことだ？」

「ごめんなさい。こうするしかなかったの。中国を救うため、この世界の未来を救うため・・・」

「・・・・・」

中国を救う？世界を救う？俺にスタンガンかけて神経毒を盛ったところで中国も世界も救われないのだが・・・

「意味がわからん。取りあえず学校へ帰してくれ」

「それはできないわ。それにもう遅い」

海聖の願いをためらいもせずきっぱりと断る鈴花。
彼女の眼は本気の目だ。いつでも戦闘態勢にとれるような仕草と、戦う戦士の目。

「何をわけのわかんねえ事を」

「もう星霜学園はＳＴＯ軍に強襲されているわ」

「どういうことだ！！」

「そのまんまよ。エンジェル対策本部“ルシファー”は容赦ない。あなたを脅すため綾菜を捕獲しに行ったのよ」

「なんだと！！」

海聖は頭に血が上り、そしてもうダッシュで進もうとする道を遮る鈴花。

「もし、これ以上進むなら実力行使させてもらうわ」

「実力行使・・・・ぷっ・・・・」

「わ、笑ったな！！」

顔を赤めてものすごい勢いで悔しがる鈴花。その姿がさらに面白く海聖は瞬く間に苦笑いから爆笑へと移っていく。

「お、お前・・・ほ、ホントに俺に勝てる、と思って？」

「ええ。あなたはまだ覚醒していない状態のメタモルフォーゼ。神

としての実力は１００分の一にも満たない」
その言葉を聞いて余裕だった海聖の顔は凛々しくなった。それと同時に湧き上がる殺気。
「なぜ・・・“メタモルフォーゼ”という言葉を・・・」
「あら？別の世界からくるなら未来からくるってのも悪くはないと思うけど・・・」
「成程」
そう言うと覚悟を決めた海聖は右腕を物騒な物へと変える。
全てが金属でつくられ、直径５~６ｃｍはあろうかという穴。さらに海聖がつくる物だ。相当物騒なものに違いない。ただの砲ではなく・・・電磁投射砲レベルの・・・
「鈴花・・・そこをどけ！！これが最終通告だ」
「どかないわ」
「！！」
これだけ物騒な物を向けても怯まない鈴花。むしろ余裕の顔さえしている。
それがどかないという度胸に感心するとかよりもむしろ恐怖を感じた。
海聖自体、何も知らない敵ならば下手したら粒子砲レベルの物で敵

をふっ飛ばしかねないが鈴花は海聖の男女合わせた友達の中でもかなり親しい友達だ。殺すわけにはいかない。

つまり形だけ脅しで、中身は０．２~３ｍｍ程度の麻酔針だ。

（しかたがない。眠らせるか・・・）

そう。眠らせるだけ。そう考えていた海聖だった。

“シュン”

風を切るその音。

時間にして僅か０．１秒もない

――――その刹那

“シュン”

「いっ！！」

「どうしたのかしら？」

海聖は何が起こったのかわからないまま痛い耳を触れる。

手についていた物。それは赤色の液体。血液だ。

その瞬間海聖は身体が重くなる。

「麻酔針とはね・・・・私もなめられたものだわ」

目がくらむ中、おぼろげに鈴花を見上げる。

「どういうことだ？」

俺はあいつの首筋向けて麻酔針を放った。

それが方向を変えて俺に向かってきた。

「私と戦うならもっと本気で来なさいよ。そうでないと」

「そうでないと・・・」

「死ぬわよ。海聖」

＃２１　海聖ＶＳ鈴花ー中編ー

「はぁ！！」

海聖の右腕から放たれた砲弾は重力に逆らわずまっすぐ進んでいった。

狙いは目の前の少女。

李鈴花。クラスメイト。海聖の友達。

そして海聖の敵。

「無駄な足掻きよ」

砲弾は０．００秒の世界で鈴花に直撃する筈。それが常識であり、この地球と言う惑星の中の原理である。しかし、その常識も地球の原理も、物理法則全てを塗り替えた事が起こった。

海聖の後方で燃え広がる建物。しかし、これは海聖達が破壊したものではない。

星霜学園強襲と共に進んだＳＴＯによる大侵攻。これにより星霜学園周辺の街は戦闘によって焼け野原と化している。

そんな焼け野原の中、大国間同士の戦闘を無視し続け、自分達でアクション映画の長編が何作も作れそうなほどの激しい戦闘をする海聖と鈴花。

「またか・・・」

これで４８回目。麻酔針の事を入れれば４９回目だ。

海聖の鈴花に対する遠距離攻撃が跳ね返された回数だ。

「だから言ったでしょ？私にあなたの攻撃は効かない。そして、私の周りの世界でこの世界の常識と、物理法則は通用しないわ」

「ちっ」

舌打ちをする海聖の頭の中ではスーパーコンピューターがフル活動中である。

スーパーコンピューターに脳みそを変えたのは麻酔針対策からだ。

コンピューターに麻酔など効かない。そして何より調べないといけない事がある。

勿論鈴花の能力についてである。彼が知る能力の中でこんな能力は聞いた事がない。彼自身、能力者育成施設にいた能力者たちの能力はすべて知っている。その中の一欠片にも当てはまらないのだ。

（俺の放った弾が鈴花にあたる寸前で逆方向へと向かって行く・・・どういうことだ？反射という説もあるが・・・俺の知る反射は目に見える範囲で、認識できないものは反射をする事が出来なかった）

「あらあら？理解できないのかしら？」

（遠距離が無理なら・・・白兵戦で挑もう）

海聖は右腕の速射砲を変身させ、軍刀へと変える。それと同時に背中から翼を生やす。

「これが噂の神の翼か・・・こんなものを見せられれば神として疑わないわね」

「何を言っているのかわからないが・・・」

迷うことはない。鈴花は友達。でも綾菜を傷つけると言うなら容赦はしない。

「もらった！！」

海聖は一気にスピードを上げ鈴花の腹へと軍刀で切り込みを入れた。

その感覚。サクッと。確実に切れた。

その感覚は確信へと変わる。鈴花を倒したと。

だが・・

「かはっ！！」

空を舞っていた海聖が突如として墜落する。表現の仕方を変えれば堕天使とでもいえよう。

一種の皮肉ではあるが・・・

「げほ！！げほ！！・・・はぁ、はぁ・・」

海聖は口から噴き出した血を見る。そして腹部からの痛み。
まるで刀傷のような。
「ど、どうなっているんだ？」
能力の副作用で身体を修復する。
（この傷の位置。あきらか俺が鈴花を切った位置だ・・・）
何をしたのかさっぱり理解できない。
“私の周りの世界にこの世界の常識は通用しない”
“物理法則も通用しない”
俺の繰り出した攻撃はすべて俺の元へと帰ってくる。相手に起こるはずの現象が、すべて俺に起こったことになっている。
（そういうことか？・・・・いや、でも確証はない。確かめる方法もない）
「あなたの取る方法は一つよ。私の言う事を素直に聞くか、私と戦って力尽きるまで再生能力を使い果たして殺されるか・・・あなたが星霜学園に行くことはあり得ないわ」
「くっ！！」
一か八か試してみるしかない。俺の予想が正しければ、俺の攻撃は成功する。

だが、これが成功しなければ奴の能力は他に候補がない。

「俺の取る選択は・・・」

「ほう・・・この二つから選択する気なのね」

「お前も助けて、星霜学園のみんなも助ける！！」

「はい？」

#22　海聖VS鈴花ー後編ー

「私を助ける？」

「ああ。それが俺の答えだ！！」

海聖はそう言うと右腕を再び砲身へと変える。

「だから・・・いくら、海聖が強力な武器を作ろうと、私にはその攻撃は効かないのよ」

海聖の今まで攻撃した回数５０回。

そのうち遠距離攻撃４９回。近距離攻撃１回。

遠距離攻撃はすべて方向を変え撃った本人の海聖の元へと向きを変え進んでいった。

そして近距離攻撃は鈴花に当たった。そう、確実に腹部を切り裂いたのだ。

でも、切れていたのは海聖の腹部。

この結果からわかる事は鈴花に攻撃してもすべて自分に帰ってくる。しかも、反射とかそういう類ではない。

「そうかい。なら一回喰らってみるといいさ」

海聖はそう言うと標準を鈴花に向ける。

「・・・・・・」

狙うは頭部。しかし狙ったところで跳ね返ってくるだろう。でもそれでいいんだ。

そう、跳ね返ってくるように設定してあるならば・・・

砲身に電気が流れる感覚がある。そう、これは電磁投射砲。英語で言うならばレールガンだ。

風を切る音。目では見分けのつかない速さ。

そしてその弾丸は今まですべて跳ね返ってきた。だが、今回は違った。

「！！」

突如として海聖から放たれた弾丸は鈴花の少し手前で爆散した。

「な、何これ？」

「吸ってみればわかるさ・・・」

口を押さえる鈴花だが、何もならない。

「どういうこと？」

「ただの酸素だ」

俺があの中に入れたのはただの酸素だ。だが、その酸素はどうやって作られたか？

「鈴花・・・一つ聞いておけよ」

「な、なによ・・・」

「今ここで蔓延している酸素は俺がつくったものだ。そしてお前はそれを吸った」

「そ、それがどうしたのよ」

「その酸素・・・俺の物なら俺が自由に操れるんじゃないかってね・・・」

「ま、まさか！！」

もう鈴花の肺に到達しているだろう。海聖が作り上げた酸素が。

「悪いね。俺が思うように操作すれば今からどんな物質にでも変えられる。だが、俺が作り上げる物は二酸化炭素か？または毒物か・・・俺以外誰も知り得ない」

「な、何をするつもり？」

「こういう事さ」

“パチン”

海聖は指を鳴らし鈴花の方を向く。その瞬間

「うっ！！」

「どうした？」

「な、何でもないわ」

突如として肺を押さえて苦しむ鈴花。その痛みの原因は鈴花自身わかっている。

海聖が作り上げた酸素を吸い、それが別の物質に作り上げられたことだ。

その物質が肺のどこにあって、そして何の物質なのか理解できればまだいいのだが・・・

「どうした？早くして見ろよ」

「なにを？」

突然楽になった肺に違和感を感じながらも鈴花は知らないふりをする。

「もう吐いちまえよ。俺は解っているんだぜ。予測した出来事と全く逆の出来事にする。だがお前はどんな事が起きるか予測できない限り、俺に攻撃することすらできない。それが鈴花。お前の能力だ！！」

「・・・・あたりよ。言い方を変えれば事象変換（イベントチェンジ）あなたがこれから私の身体で何するか解らない。予測しようのない事は変換しようがないもの。降参よ」

今まで弾丸が見えないのにもかかわらず操作で来たのは自分に弾丸が飛んでくると予測していたから、その事象の対象が鈴花から俺に

変わったというわけだ。

近接攻撃は自分に攻撃してくるのはいつかも解らないし、どのように攻撃してくるかもわからない。だから、自分の身体が切れてから事象変換をすれば海聖が切れたことになる。

だが、海聖生成酸素については体内のどこにあるのかもわからないのにどうやって海聖と事象を変換する？さらには酸素を別の物質に変換されたとしても、何に変換したか解らず結果的に事象変換が行えない。

「じゃあ、これでＯＫだな」

「ええ。もう、私にはみんなに合わせる顔も、お兄様に合わせる顔もないわ」

「意味のわかんねえ事言ってんな！！ほら行くぞ！！俺を学校まで案内しろ」

「えっ？」

思いっきり乱暴に、でも優しく鈴花の手を引っ張ったのは海聖だった。

「少しでも罪悪感があるなら今ここで償え。お前ならやりなおせる」

「待ってよ！！」

そう言って海聖の腕を強引に振りほどく。

「私のせいなのよ・・・・こうなったのも。私さえいなければ・・・・星霜学園のみんなも・・・・」

立ち崩れ、泣き叫ぶ鈴花。先程とは雲泥の差の弱弱しい鈴花を海聖は強く抱きしめた。

「なら、俺がお前を友達として必要としているなら問題ないだろ？私さえいなければ？今更遅いんだよ。過ぎた事はしょうがない。なら、今から修正しに行くぞ。その能力。役に立つからな。さあ来い」

立ちあがった海聖は崩れた鈴花に手を差し伸べる。

「う、うん！！」

海聖は鈴花と共に学校へ向かう。星霜学園奪還のために。

#23　星霜学園強襲

２０５１年４月１５日
――――星霜学園

「投下！！」

星霜学園上空を飛行中のＳＴＯ軍ガンシップから投下されたのは電磁パルス爆弾。

コンデンサを利用した爆弾で、今の時代ならではの兵器。殺傷能力がないものの敵の軍隊を無力化させる爆弾。

上空数百メートルで爆発した爆弾はコンデンサを利用する事により、半径数十キロ範囲に発生した電磁パルスによってケーブル・アンテナ類に高エネルギーのサージ電流が発生。電子機器に過剰な電流が流れることによって、半導体や電子回路に損傷を与えたり等の一時的な誤動作を発生させる。

いわゆるＥＭＰ攻撃と言う物である。

本来軍隊で使うとするならば、本国から飛んできた核ミサイル、もしくは先程言ったコンデンサを利用した爆弾が高高度爆発を起こし、広範囲にわたって電磁パルスを発生させ、電子機器に被害を与え、電子戦ができない状態で攻めるのが基本だ。

つまり、それは現地で戦闘を行う前にする事。もう既に現地で戦闘が行われている状態でのＥＭＰ攻撃は味方も被害を受け下手をしたら自殺行為なのである。

――――――――――――現地戦闘において敵はＥＭＰ攻撃をしてこない。
それが常識。

もし攻撃したとしても周辺の軍隊に被害が出るから、ＥＭＰ攻撃した後は両軍とも動けない。例え戦闘で勝ったとしても、現地のライフラインの停止から、電気が使えず不利な状況になりやすい。つまりすでに戦闘中の戦地でのＥＭＰ攻撃はしない。そう考えるのがいまの常識だ。

星霜学園を警備していた対空レーダーや戦闘車両、４５式などには、常識に沿ってＥＭＰ対策はしていなかった。

よって・・・

「な、なんだ？突然４５式の電源が落ちたぞ？」

「こ、こちらレーダーが反応しません」

あちらこちらで聞こえる悲鳴。だが、電子機器麻痺状態ではまったくの無意味だ。

それに続くように

「エンジェル対策本部隷下対エンジェル用部隊“ルシファー”投下」

その言葉と共に大型の輸送機からＢｅ－４７　ヴェレスと強化外骨格を装備した兵士が次々と星霜学園へと降り立つ。校庭、屋上、駐車場、駐輪場。挙句の果てには教室へと突っ込んでくる。

そして星霜学園は蹂躙されまくる。

だが、そんな事に気づかない。本来最初に気付かないといけない兵士は、電子機器復旧のため忙しく、気付いたのは歩兵部隊だけであった。しかし、連絡しようにも電子機器麻痺の状態では連絡が取れず、ＬＷの４５式は動けないまま、上空から縦横無尽に攻撃を仕掛けるＢｅ－４７　ヴェレスに駆られていった。

「な、何なんだあんたたちは！！」

教室にいきなり飛び込んできた兵士に対し授業中の教師は講義をする。

「？默（だまれ！！）！！」

“パァン”

懐から取り出した拳銃によって生徒の目の前で教師は無残に殺された。

「そ、そんな・・・」

目の前で北日本の再来を思い浮かべた綾菜は発砲した中国人に向けて発した。

「从日本出去（日本から出て行け）」

北日本に住んでいた綾菜にとって中国語やロシア語は流暢に話せる。日本語は親から教わっていたから普通に話せるし、ハングルも僅かだが話せる。

その行動を見た兵士は

「こいつは使える。まさか、俺らの言語をしゃべれるとは。通訳として使う。連れて行け」

「はっ！！」

隊長らしき人間が命令を下した瞬間部下達が綾菜を引っ張る。

「は、離しなさい！！」

「お前は通訳に使える。通訳として来い！！」

「触るな！！」

「五月蠅い女だな！！」

綾菜の抵抗もむなしく。取り押さえられて、屋上へと連れて行かれた。

その頃

――――――校門

「まずいわね・・・・」

「もう既に襲撃されていたか・・・」

海聖と鈴花が見た光景は燃え広がる校庭と駐車場。所々から火の手と煙が上がる校舎だった。

「しかし、海聖を脅すために綾菜を殺すことはしないはず。綾菜を守るためにすぐさまに教室に部隊を派遣すると思うわ」

「成程。更に脅しをかけるとしたら、多次元日本救済計画本部に見せたいはず。なら電波のいい・・・」

「屋上ね」

「そういうことだ」

とは言え・・・教室の入り口は強化外骨格兵士とＬＷで固められている。爆発でも起きたらすぐにばれてしまう。

「どうするかだな・・・」

「ここががんばりどころよ」

「ああ」

俺達の反抗は始まったばかりだ。

#24　反抗

「キャアアアアア！！」

「ひゃひゃひゃ！！」

飛び交う銃弾。何度も耳に入る悲鳴。そして破壊音。
流れ弾により被弾していくのは、何の罪もない生徒たち。

そして銃弾をまき散らすは敵国の兵士。

「がは！！」

星霜学園を警備していたＮＡＴＯ軍はＥＭＰ攻撃を喰らってから通信網と電子機器の破壊から復旧できずに指揮系統がグダグダになりＳＴＯ（ルシファー）軍の落下傘部隊による強襲で次々と兵士が殺されていく。本部としていた放送室が発見され、中にいる兵士が殺されるのも時間の問題だろう。

「・・・・敵に気付かれないように敵を倒すか・・・・」

「無理難題言ってごめんなさい。でも、こうするしかないわ。多次元日本救済計画メンバーがここにいるってばれたら綾菜は・・・」

それだけは避けなくてはならない。

「・・・・ちょっと厳しいわね」

「確かに・・・」

ここをばれずに通るのは無理だ。海聖はそう考えたが鈴花は全く違う事を考えていた。

「あなたの事よ。まだ１００分の一にも満たない力では・・・・難しいわよね」

「ば、馬鹿にしてんのか！！」

「しっ！！」

「ふがふが・・・」

つい大声を出してしまったのかうつ伏せ姿勢で鈴花に顔面を地面に押しつけられる。

「で、どういう意味なんだ？」

「あなた・・・・何でも物質を作れるとか言っているけど・・・・電気とか音とか火とかって作ったことある？」

「・・・・・そういえば・・・・ないな」

「出来る？」

「物質を作り上げて化学反応を起こさせれば出来るが・・・・まずやった事がない」

「もし出来るならでいいけど・・・ＥＭＰ攻撃ってわかる？」

「ああ。それぐらい勉強した」

戦争するためにここにきているんだ。それぐらいの軍事用語ぐらいは学んでいる。

「学校が入る位の範囲に電磁波を展開できないかしら？」

「成程・・・それができれば・・・」

「通信網はグダグダ。ばれずに救援作戦を行えると」

「わかればいいのよ」

「成程。だが、敵もバカではない。ＥＭＰ対策ぐらいしているだろう」

ＥＭＰ対策・・・その名の通りＥＭＰ攻撃に対抗する手段である。電子装置に金属箔などでケーブルをシールドするとか、破損されそうな部分に半導体の代わりに真空管を使うなどである。

「大丈夫よ。あいつらは経費削減とか言ってそんな対策本国でしかしてないから。前線部隊にはされていないわ」

「了解」

俺は言われた通りにイメージしてみる。手のひらに炎を出すような。

「・・・・・」

だが、一向に手から炎が出ることなどなかった。

「だめだ・・・・」

「やはり１００分の一じゃ・・・」

そう言いかけた鈴花は海聖の方を向くと息をのんだ。

「な、なにそれ？」

「携帯ＥＭＰ兵器。もう一つの日本で実用化されたコンデンサを利用した電磁波弾頭が搭載された携帯ミサイル。前線に取り残された部隊が、敵の戦闘兵器を無力化し生き残る確率を上げるために作られた兵器だ。半径は５００ｍ位だが・・・まあ、それなりに使えるだろう」

ついでにスパコン脳みそはただの脳みそに変えておこう。電磁パルス食らったらたまったもんじゃない。

標準は星霜学園上空。

スコープを合わせ、トリガーを軽く引く。

白い煙と共に発射されたミサイルは空高く舞い上って行き・・・

「いまだ」

海聖のその言葉と同時に爆発する。その瞬間

「ん？・・・電源が急に？」

「どうしたんだ？」

校舎内の兵士から次ぐ次ぎと聞こえてくる声。ヴェレスが故障した。無線機が使えん。電源が落ちたｅｔｃ…

「あのＬＷもう動かないぞ」

「なら成功ね」

侵入経路の前にいたＬＷと境界外骨格を装備していた兵士の膝がガクンと落ちる。

制御システムがダウンし、人工筋肉が動かなくなったＬＷは重さに耐えきれず。

また強化外骨格を装備している兵士も油圧駆動を制御するシステムがダウンし全く動かず。

今はただのおもりをつけているだけにすぎない。そこらのガキよりも弱い人間だ。

人一人殺さず侵入経路を経た海聖達は綾菜を探しに校舎へと向かう。

「綾菜・・・生きてろよ」

切にそう願う海聖と鈴花だった・・・

#25　VS震煉

「うらああ！！」

「ぐはっ！！」

次々となぎ倒されていく兵士。

兵士をなぎ倒し進むは黒い覆面男と覆面女。

「いくらばれないようにってこの格好はさすがに・・・」

「学校の生徒にばれるよりはましだろ？」

まあ確かに。と、うなづく鈴花。

「こちら核海聖。衛星で確認できたか？」

ただいま海聖の脳みそは元通り。ＥＭＰ対策でスパコン状態ではない。

耳に取り付けられた小型のインカムで萌仁香と通話中である。

「ええ。屋上にいるわ。確認した限りだと、通訳として使われているみたい。綾菜と言うのはばれていない」

今の衛星は２０００年代初期に比べてはるかに進歩した。人間の口元まで確認できるほどに進化し、口元を確認する事によって会話内容を確認する事も可能だ。

「そうか。ありがとう。鈴花、屋上にいるようだ。行くぞ」

「ええ」

小学生こと月見里萌仁香と連絡を終えた海聖はノンストップで屋上へと向かう。

その頃

――――屋上

「ちっ！！脅しをかけようにも何も出来ねえ。まさか、自軍の放った電磁波でこうなるとは！！」

電子機器の不調でＮＡＴＯに脅しをかける事が出来なくなったことに腹を立てているのはエンジェル対策本部隷下対エンジェル用部隊ルシファー星霜学園強襲部隊指揮官。

「どうした？何があった？」

「ああ、これは震煉殿。自軍のＥＭＰ攻撃の所為かこれらの機械に不備が発生していまして・・・」

李震煉。鈴花の実の兄にしてＳＴＯにとってＮＡＴＯで言う核海聖的な存在。

そして唯一無二の核海聖に対抗できる存在。

「我が軍が投下されたのはＥＭＰ攻撃後だ。我が軍にＥＭＰ被害が出ることはあり得ない」

「いやでも、現にこうなっている以上は・・・」

「まて。ということは・・・・」

震煉に思い浮かんだことは一つ。海聖によるＥＭＰ攻撃だ。

ならどうすれば海聖はＥＭＰ攻撃が可能か？

一つは鈴花が核海聖に敗北し、核海聖がはなった電磁波弾頭による被害。

二つ目は鈴花が裏切り核海聖とともに星霜学園を奪還しようとした結果による被害。

そのどちらでもいい。ここに核海聖が来たら殺すまでだ。

「ん？その女は？」

「通訳代わりとして教室から拾ってきた女です。中国語が喋れるので」

「こいつは・・・・・」

間違いない。俺の探し物だ。

「ほう、お前が赤薙綾菜か？」

「！！」

突然の事で言葉を失う綾菜。それと同時に感じた命の危険。
前も経験したことあるこの感覚が、痛みを受けた身体が綾菜に逃げろと命令している。
だが、その身体が恐怖におびえる心に負け動けない。
そんな時だった。
「綾菜！！」
バンと大きな音と共に聞こえたその声は綾菜のよく知る声。
同じ家で寝食をともにし命の危険を救ってくれた、心から信頼できる唯一の家族。
「か、海聖！！」
「・・・・きたか。人間から神になりあがった男」
「神だか何だか知らんが・・・綾菜に手を出すな！！」
体中から重火器を出現させ綾菜に被害が出る事を無視して震煉にそう攻撃する海聖。
震煉の周りを囲むようにして飛んでくる銃弾、砲弾、ミサイル。八方ふさがりなはずなのに彼は余裕だった。
「そ、そんな・・・・」
「これでおしまいか？」

海聖の攻撃はすべて無力化された。どんな攻撃したかは予想できる。
映像でも見た。

だが、ここまでとは・・・・予想していなかった。

海聖の放った弾は何もなかったかのように消え散っていったのだ。

「かかって来い。核海聖！！」

#２６　とある妹の反抗

“ドウドウドウ”

大型回転式多銃身機関砲（アベンジャー）が海聖の右腕で炸裂する。

直径３０ｍｍの砲弾が毎秒６５発。弾丸初速１，０６７ｍ／ｓの速度で放たれる。

放たれた弾丸は星霜学園の屋上を飛び交い、周りのコンクリートを手当たり次第粉砕していく。

アベンジャー

――――――復讐者と言う名を持つ兵器。

その姿は復讐者とは程遠い。いうならば破壊神とでも呼ぶべきだろう。

だが、本来海聖が破壊したい“破壊者”ではなく全く関係ないコンクリートしか破壊できていない。

（あいつの半径１ｍ程度で弾がすべて消えている）

その姿は不思議なものだった。遠目で見ている海聖達にはまるで震煉の周りに近付いた砲弾が一瞬にして消えているように見える。

「なんか・・・周り熱くないか？」

「そういえば・・・・」

その声にある事を思い出す海聖。

“固有振動を特定してそれと同じ振動を浴びせかけ物質を破壊するソリタリーウェーブと電磁レンジみたいに物体にマイクロウェーブをかけて蒸発させる”

萌仁香から聞いたデストロイアの攻撃パターンだ。

「そうか！！マイクロウェーブ」

「おお、よくわかったな。さすが神様。その通りだ。俺の周りから発せられているマイクロウェーブによってどんなものでも瞬時に蒸発させる」

「成程」

蒸発させるなら気体以上になればいい

なら

「これならどうだ？」

可視光線兵器。物質でない光はマイクロウェーブにもソリタリーウェーブの被害も受けない。

対空兵器として利用されている戦術高エネルギーレーザーレベルなら人間を殺すことなどたやすい。

物々しい腕へと変化（メタモルフォーゼ）を遂げ可視光線を放射する。

放たれた可視光線は重力の影響を諸共せずに真直ぐ直線に進む。

進む先――――李震煉。

「フッ・・・」

口元がにやりと緩んだ瞬間震煉に向かって進んでいた可視光線は物理的にあり得ない角度で曲がって、震煉をよけた。

「成程・・・可視光線か・・・たしかにそれじゃあソリタリーウェーブもマイクロウェーブも効かないわけだ。消す事が出来ねえからなあ」

海聖の顔はすごく落ち着いていて冷静な顔つきだった。

顔だけは。心の中、頭の中はパニックに陥っている。国で例えるならば首都機能麻痺状態とでも言っておこう

可視光線を曲げた・・・・どういうことだ？

「あれ？案外冷静か・・・つまらん」

（可視光線を曲げる・・・・耐熱素材の鏡などならまだ可能だろう）

しかし、そんなもの空中に浮かばせるような手品は無かったし・・・

（つまり、光子・・・もしくは光波を操れるということか？）

それならつじつまが合う。陸軍の兵器にも可視光線を積んでいた兵器がある筈なのにそれさえ倒したのだから。

だが、それでは能力がついに3つになってしまう。2つでさえおかしいはずなのに・・・

「まてよ・・・」

光子ではなく光波と考えるとしよう。マイクロウェーブ。それは物質に対しマイクロ波を当てることにより物質を温めて蒸発させる波だ。

次にソリタリーウェーブ。物質の固有振動数を割り当てその波を当てることによりその物質と共鳴現象が起こり物質を破壊する。

そして最後の光波を操るということだ。光波といっても言い方を変えれば波の一種だ。

この3つの共通点。それは波動を操っている事。

「成程。貴様の能力は解った」

「ほぅ？で、対策は？」

「今はまだ、無い」

そうきっぱりと言い切る海聖。だが、そんなこと自慢して言えることではない。

自分が負けたと負ける前から宣言したようなものだ。

「そうか・・・なら死ね」

手を掲げる彼の瞳には何の迷いもない。ただ殺す。

感情もないその瞳に海聖は身体が動けなくなった。
手から出てくる見えない波動。マイクロウェーブ。ソリタリーウェーブ。それともフォトンだろうか？
身体が震えているのがわかる。恐怖じゃない。ソリタリーウェーブで身体が崩壊を始めている。
「駄目ええええ！！」
突如聞こえた声に俺は身体が不意に動く。それと同時に震煉の身体がぐにゃぐにゃ動き出した。
「鈴花・・・貴様・・・今何をしたのか解っているのか？」
「わ、わかっているわ。でも、この人を、核海聖を、お兄様には殺させない！！」
そう言うと鈴花は自分の身体にナイフを指す。
「な、何やってんだ！？」
あわてた海聖が止めに行くがそんな心配は必要なかった。
「うっ！！」
突然嗚咽を出した震煉。彼の腕からは血が流れている。
「そう言うことか」

ナイフが刺さっていたはずの鈴花の右腕には何も刺さっていない。

「イベントリジェクション。我が妹ながら、今の核海聖に比べたらとてつもなく厄介だ」

「そう。あいにく私もお兄様が厄介でしてね」

星霜学園屋上で今まさに超能力者兄妹対決が始まろうとしていた。

「海聖を殺そうとするなら私はお兄様を殺します」

#27　鈴花死亡

「はぁ！！」

辺りから無数の見えない波を出す震煉。ソリタリーウェーブなのか、マイクロウェーブなのか？または別の波なのか？

「ふん」

だが、何もなかったかのようにそれを無にする鈴花。

「さすがわが妹」

「お兄様の攻撃パターンは読めていますから」

さすがと言うべきか・・・長年一緒にいた家族と言うこともあってどんな波動を生成してくるかわかっている。

そして起こった事象を交換する事を解っていたかのように同じ波動を生成してぶつけ合い無力化している震煉もさすがと言うべきか・・・

俺の事を神だとか言っていたが、俺とは比べられないほど強い。

なのになぜ俺が神なのかいまだ理解できない。

「さすがの俺もそろそろ飽きてきた。終わりにしよう」

「私を倒せたらの話ですが・・・」

「いいだろう」

そう言うと自分の目の前に手をかざす震煉。どんな波動が出てくるのか俺には想像もしがたい。きっと鈴花にはわかりきっている。そう思っていたのが間違いだった。

「う、う、う・・」

「どうした？」

「な、なんですの？」

突然頭を押さえ出す鈴花に俺は着いていけずただ見ることしかできなかった。

「音波。それも特殊な」

「音波？」

「能力者はＧ－細胞の適合者のみ生まれる。Ｇ－細胞を身体に摂取した者は遺伝子細胞が変化し、脳みそに多大な影響を与える。それに身体がついていけないものは細胞が劣化。化け物になる。ついていけた者は超能力と言う物が生まれる」

「そ、それぐらい知っていますわ」

「能力をつかさどる大部分は脳みそ。こいつみたいに例外もいるが、ほとんどの能力者は脳みそ。そして物には固有振動数と言う物があるように能力にも特殊な振動数がある」

震煉は海聖に眼を飛ばしながら話を続けた。例外と言うのは海聖の事だろう。

「振動数？」

「ああ。能力をつかさどる脳みその部分を封じる振動数」

「それって・・・つまり・・・」

「物分かりが速いようだな。譲ちゃんは」

口をつい先ほどまで閉じていた綾菜が珍しく開いた。

「能力を封じる・・・・」

「ああ。その逆もあるようだが、俺の能力波動生成の副産物であらゆる波動を読み取ることもできる。相手の能力を封じる固有振動数も・・・まあ時間がかかるが」

「まさか・・・」

「そう。鈴花。お前は今能力を使えない。覚悟しろ！！」

振りかざした手から出るのは光の筋。可視光線だ。

海聖の読み通り、震煉は光波を操れる。

「かはっ！！」

いくつもの光の筋が鈴花の綺麗な身体を貫き、宙には赤い雫が飛び散る。

吹き飛んだ鈴花の身体はコンマ数秒の間に地上に墜ちて行く。

「鈴花あああああああ！！！！！」

俺は叫んでいた。倒れた鈴花の元へ走る。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・待ってろよ。今治療してやる」

海聖の治癒能力。あらゆる物質を作り出す海聖にとって人間の細胞を作り出すなど朝飯前だ。だが、その朝飯前の行動すら、震煉によって遮られる。

「邪魔だ！！」

鈴花の時とは比べ物にならない大きさの可視光線をぶつけられる海聖。肩の大部分が吹き飛ばされ、大量の血しぶきが空を舞う。

「鈴花・・・」

鈴花の横に立つ“破壊者”震煉。その姿は正に破壊者だった。いや、破壊神とでも呼ぶべきだろう。

「俺の計画に邪魔をするなと言ったはずだ。それともこいつに情でも移ったのか？」

「ふっ、・・・なんと、で、も、言いなさい。私は、この人は、世界を救う、能力、者だと、信じている。だから、殺しちゃ、いけな、

い」

「そうか。なら死ね」

「や、やめろおおおおおお！！」

震煉に向けて大声で叫ぶ。だが、その声など届かず。

「・・・あなたを・・・私は・・・」

グシャ

突如として遮られたその声。

巨大な可視光線で下のコンクリート諸共吹き飛ばす震煉。実の妹を跡形もなく消し去った姿。もはや破壊神どころではない。

「リ、・・・リン・・・ファ・・・」

「次はお前達だ」

ようやく再生した身体で起き上がる海聖。

先程まであった恐怖はもう感じない。体中をめぐるのは怒りと震煉を殺すという想いだけ。

「ぶち、殺す」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7366w/

俺はチート能力で日本を救う（仮）

2011年12月11日23時46分発行